

(仮題) エルダー・テイルのソロプレイヤー

御代川辰

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

MMO黎明期から続く老舗MMORPG、エルダー・テイル。

この大人気ゲームには、自らを神と称し数々の破天荒を成し遂げ続ける伝説のソロプレイヤーがいる。

目次

大災害前

エルダー・テイルのソロプレイヤー

樽の男

お膝元 その1

お膝元 その2

八つ当たり

大災害

プロローグ・上

プロローグ・下

ノウアスフィアの開墾 in オキナワ

海渡り、船渡し

嵐の中の電撃戦

闘争

晴れ間が見える

到着

風呂で一息\風の噂

北上

はじめまして

あなたは何者？

闘いの変異

思案

指南

素人たち

壁を壊す その一

51

49

46

44

41

38

36

33

31

29

26

23

21

18

16

14

11

8

5

3

1

壁を壊す	その二	53
幕間	Deva Akasha	55
星		58
航海		
魘夢		60
アキバの施療神官(クレリック)／船出前		63
提供		66
応答		68
扉一枚		71
U n r o m a n c e		73
鍛錬・上		76
鍛錬・下		78
幕間	総統(Mi)閣下(Lord)	80
釣り落とした魚は大きい		82

大災害前

エルダー・テイルのソロプレイヤー

01

月曜日のまだ明るい時間、一軒家の一室でパソコンに向かう中年の男がいた。画面には半透明のコマンドウィンドウと二つのキャラクターが映っている。

「そう。ぼくはこっちだよ」

正面から左、正面、また左。画面の中央に鎮座するドラゴン型のボスモンスターの周囲を、時計回りにぐるぐると忙しなく動くアバターのHPは最大値の半分に減っている。しかし、ボスモンスターのHPも既にごく僅か。

現在の彼のアバターのステータスなら通常攻撃一回で充分倒せる数値なのだが、彼がモンスターに攻撃をする素振りはない。

「そろそろこのレイドも終わり……お疲れ様、〔ニグヴェルデ〕」

哀しげに呟くと同時にマウスが弾かれ、アバターの手から矢が放たれる。その矢はモンスターの顔面にまっすぐ飛んで行き、喉笛に突き立った瞬間爆発した。

レイドボス〔ニグヴェルデ〕は文字通り一騎討ちの末、最後は一矢のもとに葬り去られたのだ。

「戦闘開始から60時間58分、最短記録更新ならずか……残念」

ゲーム画面の時計は既に、午後一時手前を指している。彼……プレイヤーネーム〔か・み〕こと土蔵将助は実に二日と半日をパソコンの前で過ごしていたのだ。

「まあ……」

傷みと白髪が目立つ長髪を掻き上げ、ふうと一息を吐く。そして画面の中央、ニグヴェルデが居た場所に山盛りに重なっている大量の金貨やアイテムを眺めながら、余裕の残るにやり顔で一言。

「天下のへエルダー・テイルでソロレイドバトルなんて、端から頭おかしいし充分か」

同日のアジアは日本サーバー、弧状列島ヤマト最大の冒険者の街であるアキバの街から遠く離れた難関ダンジョン、《ヘイロースの九大監獄》最深部。

『やった……』

『つしやあー！ヘイロースの九大監獄攻略うう！』

『長かった！大喜び祭りだぜ！』

ダンジョンボス、「九の監獄のウル」が無数の泡状のポリゴンと化して宙に四散する様を画面越しに確認した《放蕩者Debauchery Tea partyの茶会メンバーたちが喜びに震える中、丸メガネをかけ白いマントを羽織るハーファルヴ、【シロエ】を操る城鐘恵しろかねいが首を傾げる。

『皆さん、ちよつと待ってください』

シロエはダンジョン中に出現したモノリスにカーソルを合わせ、マウスをクリックする。

するとシロエのパソコン画面の中央に、過去のダンジョン攻略者たちの所属パーティとパーティメンバーの名前が列記されたウインドウが現れた。

『ああ……まだだ』

茶会リーダー【カナミ】も攻略者の名簿を確認したらしく、歯を食い縛った声色こわいろで悔しげに呟く。

皆察さつした。「また先を越された」と、そう思うのも当然。

『また例のソロプレイヤーですか？』

【ソウジロウセタ】が口を尖らせる。

『相変わらず……途方もない化け物ですにやあ』

【にやん太】もやれやれとばかりに溜め息を漏らす。

『ほんつと憎たらしいヤツ……』

【KR】も歯軋はぎしり混じりに怒気を放った。

『はい……神〃を自称するだけあって、やはり背中はずいずい遠いですね』

攻略者一覧の画面に列記されたパーティとプレイヤーの中に、確かにか・みの名が刻まれていた。

噂の男

『なあ、聞いたか?』

『また出たんだろ? 伝説の廃人が』

日本サーバー、シブヤ。ヤマトの五大都市に数えられるこの街には、現在およそ8000人に昇るプレイヤーがログインしている。

そして街にいるプレイヤーたちの話題は、あるプレイヤーの噂で持ちきりとなっていた。

『「か・み」が出たって?』

『そ。《監獄》に遠征に行った茶会からの情報よ。百パーどころか百万パーの確率で間違いないわ』

話題の中心はやはりか・み。自らを「ソロレイドユニット単独襲撃部隊」と称し、ギルドにも所属しなければパーティを組むこともなく、かといつて他のプレイヤーをクエストに誘うことはおろかフレンド登録をすることもさえもない。

分かっているのは名前と性別だけであり、この二つ以外の全てが謎に包まれた伝説的な人物。彼の名が表舞台に現れる度、世界中のゲーム愛好家たちが意識を注ぐほどの有名人でもある。

『西欧サーバー最難関クラスの《チエルノ・ミアズミール・フォルト黒い瘴毒の砦》現実のチエルノブイリ原子力発電所跡のレイドボスも単独攻略したんだよな?』

『そうそうー向こうじゃ新聞にも載ったってさー』

エルダー・テイルに限らず、現実で資金と時間に余裕があるトッププレイヤーが海外サーバーまで遠征するということは、まさしく自由度の高さが売りのMMORPGでは良くある話だ。だが渦中のか・みは遠征の頻度と規模が、他のトッププレイヤーやギルドとは大きく違う。

『北米サーバーの《デザート・ヘル・キャニオン砂地獄の巨大渓谷》現実のグランドキャニオンも本場の有名ギルドを差し置いて最初に全クリしたってマジ?』

『南米サーバーの《アンティクア・コルデイツリラ古老大山脈群》現実のマチュ・ピチュを単独踏破したことがあるらしいぜ!』

彼の存在を有名としている理由は、なにも数々のレイドボスを

ソロプレイヤー単独行動で撃破するのみに止まらない。その最たる例が難関ダンジョンの単独踏破であり、日本国内だけでも50を数え、世界全体で見れば実に300以上ものダンジョンを単独で攻略している。

そしてゲームである以上、プレイヤーたちの名はその功績を達成した確固たる証拠としてダンジョンの最奥に出現するモノリスに刻まれるため、か・みも例外なくその名簿に列つらなるのだ。

『バランスブレイカー過ぎるだろ。チーターか運営のスパイじゃないのか?』

『最高レベル統一パーティでも半年かかるレギオンレイドのクエストを三ヶ月ちよつとで攻略したこともあったらしい。これは運営のひいき最良がなきや無理だな……』

だが当然ながらその功績や存在に懐疑的な意見を持つ者も多数存在する。その内容は多岐に渡り、不正な手段を用いて功績をでっち上げるチーター説、運営が開発したテストプレイ用の高性能AI説、運営がシステムや難易度等の調整の参考にするためプレイヤーに紛れ込ませたスパイ説などが有力だが、いずれも明確な証拠がなく信憑性は薄い。

いずれにせよ彼が実在することは事実であるし、人々の興味をそそる格好の的であることもまた、彼のプレイヤーとしての技量を確かなものとしている。

『ともかく、どこにか・みが現れてもおかしくないな。というかもう日本サーバーに戻ってる頃じゃないか?』

『まだ海外サーバーにいるかもよ?先月も韓国サーバーの有名ダンジョンを単独攻略したって聞くし』

『特にアフリカの有力ギルドが血眼ちまなこになって探してるらしいね』

『海外サーバーは高難易度クエストが多いから味方につければ幸運って感じじゃない?』

ことか・みというプレイヤーにおいて、エルダー・テイルの世界を楽しむプレイヤーたちの話題は尽きることはなさそうだ。

お膝元 その1

01

南アジアはインドサーバー、《三角半島アヴァニ》^{A v a n i}北東。現実のインド亜大陸の最北にあたる地域に位置する小国《パハード・カ・ペア》^{カ・ペア}現実のネパール国第一く第四州を見下ろすように聳えるのは、ここインドサーバー有数の難関ダンジョンの一つとして世界のあらゆる有力ギルドが覇を競って来た歴史ある山岳型ダンジョン《大神山サガ^{デーヴァ・シユミール}ルマタ》^{デーヴァ・シユミール}現実のヒマラヤ山脈だ。そしてここはデーヴァ・シユミール最大級の難所として君臨する《閉ざされた女神山》^{デーヴァ・ニカタター・ミール}現実のエベレスト山と名付けられたダンジョンである。

【か・み】はそのパハート・カ・ペア北端にして最高の標高に位置する町、《ヒマ・シャーシャ》^{ヒマ・シャーシャ}現実のルクラと《閉ざされた女神山》^{デーヴァ・ニカタター・ミール}を隔てる門の、その入り口に立っている。

「ふう〜……」

将助は手を組んで肘を伸ばしながら大きく息を吐き、画面の雪景色の中に一人立つアバターを見遣る。か・みのアバターはメイン職業を^{カンナギ}神祇官とし、ビルドは^{いくさみこ}戦御覲。サブ職業に^{ふうすいし}風水師を添え、種族はハーフアルヴという肉弾戦にもソロプレイにも向かないアンバランスな組み合わせなのだが、^{まさすけ}将助本人はこのアバターを自分の理想像として大いに気に入っている。

「さて……」

またアバターの造形と同じく、^{まさすけ}将助は《閉ざされた女神山》というダンジョンを執着していると言えるほどに愛しており、インドサーバーに遠征した際には必ず訪れている。

そして今回の遠征の目的は、^{Vijaya}ビジャ・^{Dashami}ダサミインドの一部の地域、ブータン王国、ネパールなどで催されるヒンドゥーの祝祭に合作させて開催される定期イベント、ヘドウルガ神殿の血儀の攻略報酬を得るところにある。

「二年ぶりの南路北上」^{なんろほくじよう}

心は燃えていた。昨年 of インド遠征の際は、最難関級クエストへシ

ヴァとガネーシヤの舞踊宴の攻略報酬である神牛【ジュヴァーラ
N a n d i n ナンデイン】の入手に気を取られてしまい現地プレイヤーに比べて大
幅に攻略が遅れてしまったため、今回は雪辱を誓つてのレイドチャレ
ンジとなる。

「そろそろ行きますか……女神さま」

意気揚々とカーソルを動かし、アバターの移動地点を定めてクリツ
クした。

02

将助まさすけの操作の下、か・みは第一ゾーン《アブダArbudaの岩場》を進む。

さすが世界最高峰の山をモチーフとしているだけあり、その進路は
複雑怪奇な地形を成し、また冒険者ブレイヤーの道中を邪魔する役割を持つ雑魚
モンスターも平均レベルが65を越える強敵ばかり。

パーティを組んでのダンジョン攻略ですら如何に雑魚モンスター
との会敵を避け、かつアイテムの消費、装備やパラメータの損耗を抑おさえ
えて目的地に辿り着くかが鍵となる。

それゆえレイドパーティを組んでの攻略が前提となるこのダン
ジョンで、単独で、それもゲームオーバーせずに踏破を目指そうとす
ること自体が無謀なのだ。

「お！【ハラクHlakpakiパイエティ】発見！」

ただでさえ無謀な挑戦を更に無謀たらしめているのは、か・みもと
い将助まさすけが途方もない道草食いという部分にある。

「目に着いた気になるものは必ず知るべし」を信条とする彼にとつ
て、一度「気になる」と思つた物事は未知であつても既知であつても
関係ない。

その信条への盲目ぶりたるや、無邪気にして知識欲旺盛な好奇心の
化身と言つて差し支えない。

「レベル68で毒耐性个体。肩慣らしにはちようどいいや」

どういう風の吹き回しか、洗礼をするかの如く出現したモンスター
は特殊な个体。将助まさすけはますます興味を煽られ、早速アバターに武器を
構えさせる。

一方のハラクパイエティも両手を掲げるように威嚇姿勢をとるが、アイコンから見て既に戦闘態勢に入ったようだ。

「いいね。去年の秋が懐かしいよ」

エンターキーの音を合図に、戦いの火蓋が切られた。

お膝元 その2

03

チベット語で「風」を意味する言葉をその名に冠しているだけあり、「H i a k P a y e t iハラクハイエティ」が用いる特技や魔法の多くは風属性である。その特性や効果こそシンプルなものだが広範囲に渡る全体攻撃が多く、インドサーバー圏内の中堅プレイヤーたちからはレイドバトルの練習相手として親しまれている。

「危あつぷなかつた……麻痺毒仕込みとは粋いきだね」

そして将助まさすけが相手取る毒耐性持ちの個体は、やはりと言うべきか毒・麻痺系のバッドステータスを発生させる技を多く使うようだ。

例えば先ほど「か・み」に使った痺れ粉を仕込んだ突風で吹き飛ばしスタンで動きを封じる「ナムネスガスト痺れ突風」、気化させた猛毒を周辺に撒き散らす「マイアスマウインド瘴気気流」など、毒技を持つモンスターの中でもエリアボス級以上の個体が用いることが多い特技と魔法をまんべんなく放はなつて来る。

まだ一合目の序盤であるにも関わらず、難関ダンジョンの住人という称号に違たがわぬ強さを、自身の戦闘意欲を掻き立てる力を持った強敵を目の当たりにした将助まさすけは、改めて、そして興奮を隠かくすことなく言い放はなつた。

「遭遇率何パーセントって相手と戦うのは本当に楽しい！」

04

対戦相手であるモンスターの姿はいつも画面越しでしか見られず、モンスターと実際に戦うのも生身の自分ではないアバター。しかし先述した通り彼の心中には虚無感などない。否、その心は内側から溢あふれんばかりの興奮に支配されている。

あたかも思いがけない掘り出し物を、まさしく人知れず見つけた時のよう。

「戦いくさいはこうでなくちやーちまちま切りつけるだけじゃ……」

ヒヒツト&アアウウエイエイを離れ脱を繰り返す単純作業では戦いくさいを楽しめない。そ

う考えた将助まさすけは現状より遠く距離をとるべくカーソルを左下へと動かし、四角いパソコン画面の角すみギリギリの部分へと運んだ。

「つまらないもんね!」

カチツというクリツク音と共にか・みが走り出し、視界から逃れようとするとアバターをイエティが追う。ミニマップにも大きな赤丸が青い矢印を追う様子が表示されているのを確認し、そのまま下へ向けて突き進む。

今のこの行為自体はただの鬼ごっこである。要するに時間稼ぎだが、将助まさすけにとっては楽しく物事を考えるのにうってつけの手段であり、そしてこの最中でひらめいた作戦は今後のダンジョン攻略全体に影響を及ぼすほど重要なものだったりすることもある。

(このまま第一チエツクの甦りの祠まで誘おびき寄せるか? いや、もうちよつと長く楽しみたいしなあ……)

か・みはイエティ一匹を後ろに従え、マウスの操作の下にダンジョンの進行順路を奥へ奥へと進んで行く。一方現実の将助まさすけは思案が纏まとまらず、ぼんやりと鬼ごっこを続けていた。

現在のアバターとイエティの距離差、そしてイエティのHP残量の状態であれば、遠距離武器の強弓じょうきゅう☒五人張りの大弓☒とイエティの弱点属性を含む火矢で一方的に倒すことも可能。

しかしせっかくレアモンスターと遭遇したのに、全力の勝負もせず倒してしまうのはもったいない。何とか自分の望む戦いができないかとダンジョンを進み続けること40分が経過した頃、今さらになつて違和感に気付いた。

(こいつの他にモンスターがいない?)

《閉ざされた女神山》はエルダー・テイルに実装されているダンジョンの中でも屈指の難易度を誇ることから、一合目の《アブダの岩場》、二合目の《アタタA t a t aの樹林》の計二つのフィールドに限り、「進入するハーフレイド未満のプレイヤーのステータス・装備品・所持品の性能、及び効果の平均に応じて最低限の難易度に調整したダンジョンを自動生成する」という、低レベルまたは少人数の挑戦者に対する救済機能が設けられている(この仕様が導入された原因は語るまでもない)。

ゆえにか・みが自らイエティを倒さない限り、奥へ奥へと進み続けても一合目の出口に辿り着くまでモンスターは出現しない。つまりただ攻略する分には十分でも、肝心のレイドバトル要素が排除されてしまっているわけだ。

「ディーヴァヴェーダ・ネットワークエルダー・テイルインドサーバー運営会社め……ソロプレイヤーを舐めすぎると痛い目見るよ」

自業自得にも気付かず、八つ当たり気味にイエティへの反撃を開始した将助まさすけであった。

八つ当たり

完全にキレた将助は「ソロプレイヤーを舐めるな」と半ば自棄気味まさすけに「ハラクバイエティH l a k p a y e t i」との戦闘の再開を決め、「か・み」の装備武器を山刀マチエテ×グルカ山刀×グルカはネパール北部の山岳民族の総称で、ククリはグルカ諸民族が用いる山刀のことから薙刀なぎなた×三条宗近岩融さんじょうむねちかいはつおし×岩融は武蔵坊弁慶の所有とされる薙刀、三条宗近は岩融の製作者とされる刀鍛冶へと変更した。

「ごめんね。今さらで何様だけど、ぼくすつごく頭来てるから」

リーチの長い薙刀や槍は、刃が摩耗しやすい斬撃系の技よりも動きが比較的単純な突き技と殴打技に攻撃力が多く振られている。

三間半槍のようなしなりがなくとも、あるいは竹槍のように扱い難くとも、ある程度重量のある棒が真上からぶつかればその力強い勢いそのまま容赦なく地面に叩き伏せられる。

距離の優位による一方的な攻撃を可能とするのが槍という武器だ。

「手心込めて戦うなんて思わないでね？」

動きを止めたか・みに対し、アバターに向かって走り続けるイエティ。両者の距離が縮まり始めると同時に、装備メニユーを閉じて素早く戦闘メニユーを開き二つの技を選択した。

まず一つ目の技は、最初の武装変更時に既に選択していたもの。大音量とともに広範囲の敵を威嚇して防御力を下げ、自分を含めた味方を鼓舞して攻撃力を上昇させる特技で、その名前を「カイ、ウオセカムイ 猟狼の咆哮」。

二つ目は効果範囲内の指定位置に瞬間移動する移動系の特技、「飛び梅の術」。

そして三つ目は決して短くないキャストタイムを要する代わりに、MPを使い果たすまで延々と、そして容赦のない無慈悲な刺突攻撃を繰り返す攻撃系特技、「ほむらづき 穂羣月」。

技の組み合わせを見れば、誰の頭にも「殺しに来ている」ことが容易に思い浮かぶ。キャストタイムのカウントダウンが始まり、将助まさすけはイエティの攻撃の回避に努めて時間稼ぎをする。この時点での「ほむらづき 穂羣月」のキャストタイムは残り70秒。

「そして君は、今から鬼じゃなくてエサだから」

そしてまず、「カイ・ウオセカムイ 猟狼の咆哮」のキャストタイムがゼロになっていることを確認した。また、ミニマップには法輪のマークも現れる。か・みは攻撃からただ逃げ回っていたのではない。イエティをチェックポイントの付近へと誘導しながら、隙を伺うかがっていたのだ。

あくまでも目的は攻略、目的地から離れては意味がない。この間の「ほむらづき 穂羣月」のキャストタイム、残り60秒。

「これで楽しい鬼ごっこは終わり。お疲れ様、ハラクパイエティ」

眩くと同時に、か・みによる攻撃が始まった。容赦も遠慮も慈悲もない、ただただ耳をつんぎくような獣の叫び声がスピーカーを通じて部屋に、家屋に、そして将助まさすけの鼓膜にこだまする。「ほむらづき 穂羣月」のキャストタイム、残り55秒。

「へえ……ラツキー」

至近距離で響ひびいた切り裂かんばかりの大声にイエティは堪たまらず怯ひるんでしまい、動きを止めるどころか五、六歩ばかり後退あとすきした。その隙を好機と見て、すかさず「ほむらづき 飛び梅の術」を発動しか・みをイエティの真横へと移動させる。「ほむらづき 穂羣月」のキャストタイム、残り48秒。

「この連続攻撃に耐えてみなよ。ほら、ほら！」

軽く吐き出された言葉とともに、猛攻が始まった。突く、刺す、打つ、殴る、斬る、槍が持つ特性全てを全てを込めた通常攻撃のオンパレードがイエティを襲う。

通常攻撃にはほんの二、三秒程度のタイムラグしか存在せず、キャストタイムもリキャストタイムも存在しない。

攻撃力の高い相手から受ける連続の通常攻撃は、防御力の低いプレイヤー・モンスターにとっては文字通りの悪夢であり、一度でも食らえば逃れることは難しい。

イエティのHPはみるみるうちに減っていき、ついに二割を切った。

「ほむらづき 穂羣月」発動までのキャストタイムは、残り20秒。

「ありや、特技は「カイ・ウオセカムイ 猟狼の咆哮」だけでよかったかな？」

予想外の結果に将助まさすけも少し驚いたのか、あっさり「ほむらづき 穂羣月」の発

動をキャンセルする。

「でも命拾いにはならなかったね。それじゃ……」

最後は一撃で葬^{ほうむ}り去ろうと再びアバターの武器を変更し、近付いて来るイエティに向けてカーソルを合わせた。そして……

——ばいばい——

大災害

プロローグ・上

西暦2018年5月の深夜。アジアは日本国、中国地方最大の都市、広島県広島市。駅やビル街が立ち並ぶ夜も明るい中心部から遠く離れた山麓の一軒家に、まだ明るい部屋があった。部屋の中には無駄なもの一つとしてなく、また隅々まで整理整頓と掃除が行き届いており埃一つさえない。

その限りなくきれいな部屋の机には『追加コンテンツのダウンロードが完了しました』というメッセージを映すパソコンが鎮座している。

「ハウアスファイアの開墾」事前ダウンロード完了……長かったあ」

床に寝転がる中年の男が大きくあくびをしながら呟いた。心底眠そうな表情で起き上がるこの男の名は土蔵将助^{つちくらまさすけ}。所々に白髪が混じる明るい茶髪、年齢を感じさせない中性的な童顔、出不精かつ不摂生な生活を送っているにも関わらず整った体型が特徴の無職である。

そしてこの男、文字通り人生の半分を「エルダー・テイル」^{Elder Tale}に費やして来た生粋のゲーム廃人であり、自身が操るアバターの知名度も世界規模という、名実ともにゲーム界の怪物として名を馳せているのだが、彼にはもう一つ、知る者はごくわずかであろう秘密を抱えていた。(アルファテストからもう22……いや23年か……催促のメールは増える一方だし、どうしたものかなあ……)

それはアメリカ合衆国のニューヨークに本社を構える世界最大級のインターネットゲーム会社、つまりエルダー・テイルの開発と運営を同時に担うタルヴァ社の社員であったことだ。

きっかけは在籍していた大学の交換留学生としてアメリカに留学していた折、たまたま遊んでいた個人創作のTRPGに目を付けたアタルヴァ社の幹部から、「そのボードゲームよりも面白いゲームを作ってみないか」と臨時スタッフとして勧誘されたことである。

もともと無類のゲーム好きであった将助^{まさすけ}はもちろん二つ返事で承

諾し、「スタッフクレジットに名前を乗せない」「正社員としての待遇をしない」という二つの条件を提示し同意させた上で企画に参加することになる。

(えーと……うわっ、フシミとOTHEPオーテニール正式名称Открытая Новую Еру Программa社。ロシアサーバー運営会社からも勧誘が来てる)

しかし彼が制作に関わったクエストやアイテムの余りの出来の良さに製作スタッフたちは度肝を抜き、さらにアルファテストではシステムの不備をもともしない限りなく完璧に近いプレイ内容によって高評価を獲得していた。

アタルヴァ社はこの類たぐい稀まれな才能を野放しにしておくのはもったいないと、「是非正社員に」と積極的に勧誘をし始め、対する将助まさすけは「ゲームができなくなるのは困る」と留学が修了するとともに大学から退学し、故郷の広島まで帰省して現在に至る。

携帯電話のメールボックスに届いている300件超の勧誘メールは、驚くなかれ全てアタルヴァ社とその関連企業からのもの。この事から分かる通り(運営会社なので当然だが)、将助まさすけがエルダー・テイルで「か・み」として活動している事を把握しているのだ。

「いい加減放ほつといて欲しいんだけど……諦めが悪すぎるよ」

鳴り止まないメールの通知音に溜め息を吐つきつつ、椅子に座ってパソコンと向かい合う。画面にはエルダー・テイルの文字とユーザーネーム、そしてパスワード欄が表示されている。

「ゲームは遊ぶに限るもんね」

パスワードとユーザーネームを入力してエンターキーを押す。

夜空には、雲がかかっていた。

プロローグ・下

日付が変わり、雲が晴れて日が昇る頃。日本サーバーの舞台である弧状列島ヤマト南部を占める《ナインテイル自治領》現実の九州地方から更に南、《フィジヤイグ》現実の沖縄・琉球諸島最大の都市《アコ・ナハ》現実の那覇市に「か・み」の姿はあった。

特に目的があるわけではない。大きなイベントがあるわけでも、またクエストに挑みに来たわけでもない。

《禊神島ムナカタ》現実の福岡県沖ノ島の時間帯限定クエストである《三女神の禊祓》を攻略した後、ただの気紛れで《ナカス》現実の福岡市から南へ下り、さらに《火山島カラス》現実の鹿児島県桜島と《森林島イヤク》現実の鹿児島屋久島を経由してここに来て、何の理由もなくぶらついていただけである。

「たまには、こんな何でもないことするのもいいね」

将助まさすけは南国情緒豊かなアコ・ナハの街をアバターに散策させながら、少し眠たげにそう呟いた。エルダー・テイルというゲームにあつて、プレイヤーの分身である冒険者の存在理由は共通して《セルデシア》The Idessia各地を冒険することである。

だが当然ながらプレイヤーたちがエルダー・テイルの世界を冒険する目的は個人によって違う。

ダンジョン攻略に邁進する者、アイテムの収集に躍起になる者、モンスターとの戦いに情熱を注ぐ者、ひたすらロールプレイを繰り返す者、あるいは他のプレイヤーと繋がりを持つことを目的とする者。

そして将助まさすけがこのエルダー・テイルを遊ぶ目的は……

「……人生の道中は、どこにでもあるんだよね」

エルダー・テイルそのものを自身の人生とすることだ。他のプレイヤーや大地人とのやり取りこそ皆無に等しいという状態ではあるが、ただ生きるよりも遥かに多くの楽しみや発見がある。

無論仮想の世界であるゲームでも全ての事象が都合よく運ぶような事は断じてあり得ない。この不確定要素も将助まさすけにとっては障害にはなり得ないのだ。

と、か・みに街をうろつかせていた将助まさすけだがここで腹の虫が鳴いた。
一晩中プレイし続けていたために食事を忘れていたのだ。

「少し休憩しよ」

朝食を作るために机を離れる前にか・みをすぐ近くにあつた食事処のゾーンへと移動させ、出入り口すぐのカウンター越しに向かい合う
【大地人】にカーソルを合わせた。

『いらっしやいませ！お食事でしたらまずお席へどうぞ！』

吹き出しの文章の下に選択画面が現れるが、迷いなく「食事」を選んで指定席へと向かう。そしてお品書き画面が表示されたのを確認すると、そのままパソコンを離れて台所へと向かった。

ノウアスファイアの開墾 in オキナワ

01

「……………あれ……………」

将助が目覚めた時、彼の視界は激変していた。

使い込んだパソコンも、使い馴れた机も、座り馴れた椅子も、いつもパソコンと机の後ろにあった壁すらも、見慣れたもの一切が影も形もなく、見えているのはアコ・ナハの町並みと大地人たちだけ。

夢でも見ているのかと混乱し、自らの頬を摘んで力の限り引っ張るが、その身に感じたのは確かに激痛だった。

「痛い……………た……………」

自分が見ている景色は夢でも幻でもなく、紛れもない現実であることが分かり思わず身震いする。自分自身の服装に視線を移せばもう理解できた。

今の背格好はジーンズパンツにTシャツという地味な私服ではなく、明るい色地の袍と袴、黒い銅鎧と垂、金属製の臍当てに籠手、白い足袋、そして黒い鼻緒の草鞋を履いた神職を思わせるもの。

ここが現実ではないが現実であると結論付けるに至る要因は、目の前に浮かぶ半透明のステータス画面だ。画面の一番上にある名前の欄には、アバターの名前であるはずの「か・み」の字が表示されている。

「ははは……………これが今回の拡張パック？」

ありえない。だが今はこの場所こそが現実。パソコン画面の向こう側に、確かに存在していたセルゲシアの世界。

マウスとキーボードとパソコンを通じ、プレイヤーとしてアバターを活躍させていた仮想空間。

ありえない。しかし確かに、自分はここにいる。

「凄いなあ。本物の異世界だ」

慌てても何も始まらないと、か・みは平静を取り戻してステータス画面から現状の確認をすることにした。

種族 ハーフアルヴ、職業 《神祇官》^{カンナギ} レベル 90、ビルド 《戦御観》^{いくさみこ}、

サブ職業《陰陽師》おんみょうじレベル90。

所持金貨枚数307億4101万8916。

「……………このお金どうしょ」

02

その後か・みは一通りアコ・ナハの街を探索し、大地人たちからの情報取得を試みたが帰還の手掛かりは一切ないことしか分からなかった。シユリ紅宮現実の首里城を住居とするフィジヤイグ王家にも掛け合ってみたが、「前例がないから調べようがない」と断られてしまい、現在に至る。

(悪いことしちゃったな……………)

情報を得るために謁見を求めた先、紅宮の玉座の間で目の当たりにしたフィジヤイグ国王の悲痛に満ちた表情と謝罪を思い出しながら、か・みは近くの屋台で買ったサーターアンダギーを頬張る。フレーバーテキストに書かれている通りの不自然に甘い味しかしない美味さの欠片もない食事は、彼の罪悪感を膨れ上がらせるに十分なスパイスである。

「……………そうだ、アキバ」

味気のない食事の最中に、ふと思いついた。ナカスにあるトランスポートゲートから一足跳びに移動することができるアキバには、拡張パックの導入に合わせて有名ギルドに所属するプレイヤーたちが日本全国から集まっている。

これだけではない。今回のヘノウアスファイアの開墾のサービス開始に伴い、日本サーバーに限定して長期間にわたる大規模なクエストを準備中であると告知されていたのだ。

つまり日本のみならず世界中からクエスト報酬目当ての有名・有力ギルドが集まっている可能性が極めて高く、もしかしたら今回の件について何かしら情報を持っているプレイヤーもいるかも知れない、と思いついたわけだ。

「アキバなら何か分かるかも！」

おまけに自身のネームバリューは世界規模のもの。

「か・みが情報を募っている」ともなれば嘘だろうが真実だろうが勝手に情報が集まって来ると考えれば、想像より早く今回の事件の解決の糸口が見つかるかも知れない。

事情によっては自分自身を後ろ盾として頼ってくれる人間が現れる可能性も充分にあり得るのだ。

「よし、早速ナカスへ行かなくちや」

善は急げと進路をナカスに定め、残りのサーターアンダギーを纏めて口に放り込んで立ち上がる。目標地点アキバに向けて、か・みの一人旅が始まろうとしていた。

海渡り、船渡し

《フィジヤイグ島》最北端の村、《ククチブル》現実の沖縄県国頭村から更に北に向かうと、《ヘドの岬》現実の辺戸岬という特殊なゾーンがある。

なぜ特殊なのか、その理由は……

「御乗船の皆様へお知らせします。本船は《蛇神島アマミ・ナゼの港》現実の鹿児島県奄美大島と名瀬港を経由して《森林島イヤク・パレスコーヴの港》現実の屋久島宮之浦港まで運行します」

「料金は金貨200枚の後払いとなります。お席にご案内しますので、一列にお並びの上乗務員の指示に従って乗船してください」

《ナインテイル自治領》にも《フィジヤイグ島》にも所属しない、いわゆる第三者である海賊たちが運営する定期運行便が寄港する完全中立地帯であることだ。

この《ヘドの港》は人口100にも届かない小さな港町だが、大都市のような規模の大きな街と同様一切の戦闘・略奪行為が禁止されている。

禁止事項を破ったプレイヤーが即座に衛兵の攻撃を受けるのも共通しており、僻地同士の交易の要としての役割を担っているのである。

「お客様！間もなく出港します！船が揺れますのでお近くの席に着いてお待ち下さい！」

護衛役の海賊の一人が、手すりに肘をつけて海を眺める「か・み」に声をかけた。しかしか・みはどこ吹く風とばかりに手すりから離れ、心地のいい潮風にあたりながら甲板へと移動していく。男でありながら余りにも妖艶な足運びと、風に揺られる髪の毛の艶かしさ、何よりも見目良く穏やかなその童顔に、海賊は思わず息を飲む。

「いいお日和ですね」

声を返されてはっとした男は、見とれていたことをごまかすようにわざとらしく咳払いをした。心なしか頬は紅潮し、羞恥心を煽られていようだ。

「お客様、どうか船内のお席に着いて到着をお待ち下さい」

先ほどの失態もあつて緊張しているらしく、顔は汗だくで表情は強張り、さらにぎこちない物言いも相まって、とても海賊として様になっていない。

「今お客様が仰られた通り、確かに本日は快晴です。しかし風は強く波も高く立っておりますので、お客様の身の安全のためにも客室にお戻り下さい」

いくら海賊と言えど、無法者ではあつても無秩序と言うわけではな
いらしい。「海の男」としてそのように教育されているのだろうか、
それとも彼ら自身の海賊としての誇りからか、およそ自分に課せられ
た任務への責任感が強いことを窺い知ることができる。

「そつか。ありがとう」

答えると同時に錨が持ち上げられ、大きく広げられた帆に風を受
け、ついに船が進み出す。

目指すは《蛇神島アマミ・ナゼの港》。

嵐の中の電撃戦

《フィジヤイグ本島・ヘドの港》を出港してからおよそ二時間が過ぎた頃、もともと強風で波も荒かった天候は更に悪化した。青空には暗雲が立ち込めて雷雨に、波もより大きく高いものへと変化しており、船の甲板は水浸しになっている。

「進路を直進に保て！第三マストの帆を全て閉じろ！」

「船首を西に修正！面舵真方位15度！」

「乗客の安全を最優先！絶対に甲板に出すな！」

乗組員たちは一人として規律を乱すことなく操船作業を続けているが、船が荒波に揉まれる中【か・み】は船首に立ち、険しい表情で海を見つめていた。

無数の波と波の間に何かがある。それも一匹や二匹ではなく大小数十にも及んでいる。

「結構多いな……」

姿は人に似ているがヒトの形ではない。手には武器を持っているが統一性はない。海棲型のモンスターである。

か・みは海賊たちではとても太刀打ちできない相手と判断し、迷いも惑いもなく装備メニユーを開く。

「お客様っ!?!何をなさるおつもりですか!?!」

乗組員の一人が驚くのを尻目に、か・みが手に取ったのは一振りの偃月刀。その銘を「白驥偃月刀」 匈奴族之獵戈。

「ようやくこの子の出番だね」

か・みの身長を大きく上回る長大で真っ白な柄の先には、三日月にも半月にも似た形状の刃が鎮座している。そしてその刃の峰に施されているのは、モンゴル各地に点在する遊牧民族たちの間で語り継がれる美しい白馬の彫刻だ。

その巨大な偃月刀の彫刻部分を緩やかに撫で擦りながら、か・みは艶を含んだ声で囁く。

「ごめんね、一年も待たせちゃって」

どしや降りの大雨に打たれる中、偃月刀の彫刻を柔らかい手のひら

で慈しむように撫でるか・みの様子を見ていた海賊が、改めて大声を張り上げる。

「甲板は危険です！今すぐに客室に戻って下さい！」

もちろんその言葉に従うことはしない。か・みは偃月刀を後ろ手に構え、左足を後ろに下げ、その上で頭を低くする姿勢を取り、来るべきモンスターの襲撃に備える。

雨水に濡れた偃月刀の刃は、より一層輝きを増しているかのようにも見えた。

「来る」

眩いた瞬間、船首の正面から何十匹もの「サファギン」が甲板目掛けて飛び込んで来た。各々が槍、双剣、野太刀などを手に持ち、ぎよろりとした虚ろな丸目は獲物を見定めるように開かれている。

「サファギンだ！サファギンが乗り込んで来たぞ！」

か・みを船内に避難させようとしていた海賊は甲板に突然現れたモンスターに驚き、帆の調整をしようとして綱を引っ張っていたもう一人の海賊の元へと走り寄って行く。

他の船員たちもパニックにも近い状態で、統制を取るのは困難な状況に変貌している。

「作業を中止しろ！戦闘準備！」

「復唱！操船作業を一時中断！乗客を保護せよ！」

嵐の混乱の最中にモンスターの襲撃が重なり、甲板長が下した命令への対応にさえ遅れが生じる始末。士気も低く、武器も手元にない。このままでは船が沈められるのも時間の問題だ。

しかしサファギンたちが今視線を注いでいるのは、ほぼ丸腰の海賊たちではない。他にもない、武器を構えて迎撃体勢をとっているか・みただ一人である。

船員たちはモンスターの群れの中から脱出しようとしなにか・みに向けて必死に呼び掛けた。

「お客様！おやめください！無謀です！」

「本船での戦闘行為は禁止しております！どうかこちらへ戻ってください！」

「早く船内へ！危険です！」

か・みの耳には叫び声など聞こえない。不都合な雑音など届きもしない。折角生身で戦えるというのに邪魔をしてくれるな、モンスター駆除の専門家たる冒険者を見くびるな、と言いたそうに歯ぎしりをしながらサファギンたちの攻撃に備えている。

そして、凶族之獵戈の相対効果によってか・みのHPは既に八割を切っている。急いでモンスターたちを倒さなければ、この船のみならず自分自身の命も危ない。

ならば先手を打つのみ。限られた時間とMP、そして使える手数わぎの数を十全に考慮しながらの単独大規模戦闘ソロレイドバトルを。画面越しではない、生身で実行するだけ。

「クロス・ヘリックス」

舞うような軽やかな体さばきで甲板を蹴る。飛び上がりざまに逆袈裟を描くように切り上げられた偃月刀の切っ先が、まず左正面のサファギン一匹の脇腹から胸元にかけて切り裂く。

自身のHP量を大きく上回るダメージを受けたサファギンは、あっさりとポリゴンとなって四散した。

(なんだ、コマンドなんて使う必要ないじゃん)

偃月刀の穂先が真上へと持ち上げられ、空中に浮遊する感覚がか・みの全身を支配する。だが臆することなくその感覚に従い、そのまま後ろへ振り向いて今度は左袈裟懸けに得物を振るう。

「ていつー」

一撃を食らった別のサファギンも、そのままポリゴンとなった。

しかし倒したのはまだ二体、敵は百近く残っている。

HPも七割を下回っており、いかにレベルとステータスに大差があると言っても絶体絶命の状況であることに変わりはない。だがか・みは、か・みのその顔には。

「後120秒で終わらせるから、安全運航よろしく！」

童顔に良く似合う無邪気な笑みが浮かんでいた。

闘争

「120秒以内に終わらせる」と声高々に宣言し、偃月刀の切っ先を正面に向けるように構え直した。残るサファギンは87匹、か・みのHP残量はわずか2分57秒でゼロになる危険な状態。

完全に追い詰められている。

……というより自ら行き止まりへと進んだだけだが、その笑みには余裕が含まれているようにも見える。

「船旅の邪魔はさせないよ」

ぼそりと呟き、刃を上に向けて持ち上げるように突き上げた。真つ直ぐな刺突は恐ろしく正確にサファギンの喉首へと当たり、そのまま急所を貫いて後ろに立つ別のサファギンの頭へと突き刺さる。

「食らえっ！」

もちろんこれでは終わらない。先ほどの攻撃の勢いを殺さず半円を描くように、ちょうど真後ろへ向けて偃月刀を振り抜けば、今まさにか・みに飛び掛かろうとしていたモンスターを縦真つ二つに両断した。

「はい次！」

真下に振り抜いた得物を持ち上げたかと思えば、今度は更に円を描くように振るい、続けざまに自身を取り囲む5匹をポリゴンへと還す。ここままで10匹を倒し、次は足に満身の力を込めて少し遠い位置に立つサファギンに飛び掛かろうとする。

「背中がお留守だよ！」

か・みは自身が走る隙間の左側に列を作るサファギンの一匹の背に刃を突き立て、速度に任せて横薙ぎに振るい、遠心力に従って回転しながら進む。

当然ながら後ろから不意打ちを食らったサファギンも、敵が突然独楽のように宙を舞いながらこちらを切り刻んでくれば対処はできず、怒涛のように激しい斬撃の前にまた5匹が骸と化した。

「残り90秒……遊び過ぎちゃった」

16匹目の敵の心臓に穂先を突き立て、左側から斬りかかってきた

17匹目を斬り飛ばしながら呟いた。

思案している暇いとまなどない。神祇官カンナギが使える広範囲攻撃型の特技のキャストタイムは最も短いものでも30秒。☒匈奴族之獵戈☒きょうぞくのりようかを装備することで使える技には、全体攻撃系の特技は含まれていない。

ならば選ぶ手段は？残っている敵にはどう対処する？自分で猶予を定めた以上、今さら延長などできない。こうしている間にもサファギンどもは迫せまってくる。この船に乗る大勢の大地人たちの命を狙っている。

そして気付けば残された猶予は65秒、残るモンスターは67匹。HP残量は半分より少なくなり、ヘイトも徐々にか・みから遠ざかり始めている。このままでは船は沈められてしまう。しかし彼はここで逃げはしない。「追い詰められているからなんだ」と、意地でも諦めないのが彼という男。

「ならこれだ」

か・みは早速行動を始めた。まずキャストタイムの短いヘイトコントロール系の特技、「波舟なみぶねの金扇こがねあぶらぎ」を準備する。もちろんその間にもサファギンを倒すのは忘れない。

残り時間58秒、残り敵数63匹。

「京きょうの五条の橋の上」

更にモンスターからの注目を集めるため、大降りの嵐の中で唄を唄い始めた。ただし衣装は僧兵のそれではなく巫覡ふげきの狩衣、武器は薙刀ではなく偃月刀、体格に至っては強面こわもての大男でも小柄な美少年でもない、ただ童顔で華奢な中年男であるなど、唄の内容とはまるで乖離かいりしている。

残り時間51秒、残り敵数59匹。

「大の男の弁慶べんけいが〜」

敵と敵の合間を抜けるように、点と点を通り抜けて踊るように、軽やかかつ滑なめらかなステップを踏みながらサファギンたちを翻弄し、縦横無尽に偃月刀を振るう。

斬って、突いて、刺して、打って、払う。瞬またたく間もないほどに無駄なく敵を倒してゆく。

残り時間35秒、残り敵数38匹

「長い薙刀振り上げて〜」

唄を唄いつつモンスターを減らすことおよそ30秒弱。残り時間が30秒に、残るサファギンの数が36匹になった瞬間、か・みは〔波舟の金扇〕を発動した。

帆柱マストと船長室、そして客室に続く階段とそこを守る海賊たちに向かって武器を構えていたサファギンたちが、か・みの背後に現れた金色の扇へと一斉に向き直る。それが運の尽きだった。

「牛若目掛けて斬り掛かる〜」

そして蹂躞劇が始まる。この一息で、わずか2秒という短い時間で3匹が倒れた。その勢いのまま、後ろに振り向くと同時に偃月刀を持ち上げればまた1匹、足を一步踏み出せばさらに1匹、二歩目で後ろにいる1匹。

後ろに突き出す勢いに任せて体を回転させれば、彼に向かって斬り付けて来る4匹を纏めて倒す。

この間、たったの8秒。猶予は20秒も残されている。

「残り23匹、15秒もあれば片が付くね」

彼の笑顔は、か・みの微笑みは遂に絶やされることはなかった。

晴れ間が見える

サファギンの群れは順調に数を減らされていった。偃月刀を横薙ぎに振るえば、2匹が吹き飛ばされる。切っ先を正面に向けて突っ込めば、1匹の体を貫通する。振り返りざまに後ろへ切り返せば、更に1匹が倒れる。

「18秒」

残る敵は19匹。嵐に揉まれ激しく揺れる船上にありながら、まるで平地で戦うかの如き矛搦ほこしぎばきは乱れも狂いもない。アバターが持つ運動能力が補正していることが理由なのだが、現実におけるか・み自身の戦闘センスが加味されていることもまた事実。

踏み込みの力加減、打突の柔軟性、切り払いの速さ。全てに無駄がない。

「15秒」

たった一人の敵に武器を構え直す暇いとまもなく、そしてまさに反撃に出ようとした3秒の間に4匹がまたポリゴンとなった。

襲撃時には89匹もいたサファギンの群れは、たった一人の、しかし恐ろしく強い冒険者を相手に、わずか3分たらずでここまで蹂躪された。もはや勝ち目などない。否、か・みが船に乗っていたという事実自体が、始めから勝機の見えない戦いを招いただけとも言える。

「8秒」

こうして7秒が経過する頃にもまた8匹が四散した。甲板は雨に打たれ、波に煽られて水浸しの状態。そして80匹以上のモンスターが倒されたことで大量の金貨やアイテムがそこかしこに散らばったり、あるいは海に沈んだり浮かんだりしている。

「6秒」

か・みが2秒を数える間にまた4匹が切り捨てられた。残るは倒れたサファギンたちの後ろに密集する4匹。逃げ場はない。当然希望も、残さない。無慈悲な狩人の刃が、今まさに、振り向けられる。

「2秒……つと」

残すところわずかに2秒。遂に最後の一体に刃が打ち込まれ、船を

襲撃したサファギンは全滅した。

「はあく……疲れたく」

大してか・みはどっかりと甲板に座り込み、大きく息を吐く。この不定期大規模戦闘の最中に建てた目標は二つ。一つは船員たちに宣言した2分以内の殲滅。こちらは達成できたのだが、問題はもう一つの目標である。

「やっぱり15秒で23匹は……大げさ過ぎたなあ」

15秒以内に20匹以上いるモンスターを全滅させるという目標は、定めた時間を3秒超過してしまい達成できずに終わった。しかし結果を見ればわかる通り、乗員乗客に被害はなく船の損傷も微々たるもの。何よりか・み本人がまだ生きている。

「凶族之獵戈もお疲れ様」

思い出したかのように髪を整えながらステータス画面のメニューを操作し、手に持つ偃月刀を装備からマジックバッグに移動させる。危うく残量が1100を切るところでHP減少が止まり、今度こそ安堵の溜め息を吐く。

か・みの背後では海賊たちが慌ただしく、忙しなく操船作業を再開し初めている。

「被害報告を」

「甲板僅かに損傷あり、しかし人員の損害ありません！」

「乗客全員の無事を確認！軽傷者は二名、命に別状はなし！」

「よし、畳んだ帆を再度張り直せ！進路を東へ修正！」

「面舵いっぱい！晴れ間へ向けて進め！」

予想外の事案に遭遇したが、目的地である《蛇神島アマミ》には無事に到着できそうだ。黒い雨雲には切れ目ができ、日の光が筋を張っている。

「……このペースだとアキバまで二週間はかかっちゃうな……」

か・みは今になって時間の心配をし始めるのであった。

到着

か・みが利用客として乗船している船は、無事《蛇神島アマミ》の東部に位置する貿易港《ナゼの港》に到着した。そして埠頭に横付けされた縁へりに立て掛けられたスロープを渡り、数多くの人々が出入りするのが船首からよく見える。

「ずぶ濡れで気持ち悪い……」

なぜか・みが舳先へさきに座り込んでいるのかは一目瞭然である。先刻の嵐の中、波と雨に打たれながらサファギンの群れと戦っていたのだ。身に付けている衣服と防具は水を吸って重くなり、体は毛先から爪先までもがびっしょりと濡れてしまっている。

全身を隈無く襲う不快感と寒さは、さしものか・みであつても耐えかねるもの。耐え難い感覚に耐えつつ他の乗客が船から降り、波止場から利用客たちが船に乗り込む様子を眺めること10分。

「出港15分前です！乗船の方はお急ぎ下さい！」

人の出入りが落ち着いて来た頃合いを見計らい、ようやく船首から甲板へと降り立つ。足が着くと同時に濡れた髪と水を含んだ衣服から雫が落ち、木製の床を叩く音も響く。先ほどまで座っていた部分には水が深く染み込み、波と雨に濡れた他の部分よりも色が濃くなっているのが分かる。

「ああ……服が重い……」

重苦しい足取りでスロープを降り、利用料金を支払って港から出ると、《アコ・ナハ》ほどではないが活気のある港町が見えて来た。

「とりあえず風呂……」

うざったく視界を覆う前髪を掻きあげ、決して狭くはない道をまるで迷いもなく走る。とにかく風呂に入って身を清めたいのも理由だが、この《蛇神島アマミ》には利用できる宿が一ヶ所しかない。だからここにいても知れない他のプレイヤーがチェックアウトする前に到着しておきたいのだ。

「えーと、どこだっけ……」

躓つまずきそうになりつつ人でごった返す道を進み、十字路の中央から周

囲の建物を見回して目的の宿を探す。きよろきよろとあたりを見回していると、人と人の間からちらりと覗く一枚の看板が見える。

「あった！」

か・みはすぐに人が密集する十字路から離れ、《木亭宿》なる宿の入り口に立つ。そして気合いをよように頬を両手で挟むように叩き、引戸を開ける。

「ごめんくださいーい」

「いらっしやいませ！お食事でしたらお近くのカウンターへどうぞ！」

「宿泊ですか？お部屋は空いております」

引戸の先に広がっていたのは異様な光景だった。入り口から向かって右側のカウンターで宿泊表の確認をする者、円形の盆に料理や食器を乗せて運ぶ者、床やテーブルの掃除をする者、そして今自身に対応した者など、つまり大地人たちにはこれと言った異変はない。

問題は食事席で項垂れる十数人の男女である。か・みは少し引き気味に苦笑いを浮かべつつ、まずは風呂だとばかりに宿へと入る。

(……遊んでただけなのに急にこんなことになればこうもなるよね)

この《ナゼの町》にいる冒険者、つまり自分と同じプレイヤーたちは完全に意気消沈していた。帰る方法もまだ分からない、料理は微妙な味しかしない、モンスターと戦う覚悟もない、おまけに死ぬことさえもできないともなれば絶望するのは当然。

「帰りたい……」

呟く男の声には耳を貸さず、手早く宿泊手続きを終えるとまっすぐに風呂場に向かった。

風呂で一息／風の噂

01

ここは《ナゼの港町》中心に位置する宿、《木亭宿》内部の風呂場。がらんとした風呂場の洗い場で、か・みはその身を清めている。

「うつわく塩がべつとり……これ現実だったら間違いないかぶれちゃうな」

エルダー・テイルにおけるバッドステータス、つまり状態異常を打ち消すには、バッドステータスの効果を打ち消すアイテムまたは特技を使うか、戦闘を終えた後に指定の施設で治療を受ける必要がある。

対して防具は一度持ち物に入れてしまえば、きれいに整えられた状態で取り出すことができる仕様になっている。

先刻の船上での戦闘ではゲームのシステム上のバッドステータスこそ受けていないが、体か汚れることから来る不快感はある種の状態異常と言えるだろう。

垢^{あかす}擦りで肌を擦る度にぼろぼろと溢れる凝固した塩を見つめながら呟いたのも、「もしもこれがバッドステータスだったら」というたればの上での不安の吐露である。

「ふう……大分きれいになったかな？」

肌から垢を残らず擦り落とし、今度は頭を洗おうと湯桶に湛えた湯を被った。

02

「か・み？」

場面は変わり、《アキバの街》現実の東京都千代田区神田外、秋葉原。街の外へと繋がる道を二人の青年が歩いている。一人は細身の丸眼鏡をかけた《付与術師》^{エンチャンター}、もう一人は大きな鎧に身を包む《守護戦士》^{ガーディアン}。「シロも忘れてないだろ? 《死霊ヶ原》、《ヘイロース》、《黄泉津比良坂大空洞》《現実の島根県東出雲町》。《茶会》に居た頃に攻略したダンジョン全部に必ず名前があったんだからな」

鎧の青年【直継】^{なおつぐ}に指摘され、眼鏡とマントの青年【シロエ】はやつ

と思ひ出した。エルダー・テイルのプレイヤーの間では、「彼の名を知らない者は潜りも同然」とさえ言われるほどに名の知れた伝説的なソロプレイヤーの名だ。

「カナミ」さんが目標にしてた人だよ。やっと思ひ出したよ」

そしてシロエの言うカナミはかつて自身と直継も所属していた僅か27名という少人数でありながら、日本サーバーはおろか海外の有力戦闘系ギルドと肩を並べるほどの功績を打ち立て、解散して2年が経った現在も「伝説のプレイヤー集団」として語り継がれるレイドパーティ、《放蕩者^{デフォーチエリ}の茶会^{パーティー}》のリーダーだった女性である。《茶会》が各地のダンジョンの大規模戦闘^{レイド}に繰り出し攻略する度、必ず目にするか・みの名に誰よりも悔しがり誰よりも敬意を表していたのが彼女だ。

「そうだろう？というわけですか・みについて相談があるんだが……」

シロエ自身数多くのプレイヤーたちとパーティを組んでクエストを攻略して来たが、少なくとも過去に訪れた難関ダンジョンやクエストの攻略者リストの中に、か・みの名を見なかったことは一度としてない。だが、何故突然直継の口からこのビッグネームが出たのかには疑問符が浮かぶ。

「まさかか・みを探すの？日本サーバーにいないかもしれないのに？」

ハーフガイア・プロジェクトに基づいて生成された《セルデシア》のマップの総面積は地球の表面積の半分にもおよぶ。この広大な世界からどこにいるかも分からない人物を探すなど途方もない労力を要するのだが、シロエの疑問に対し直継は真剣な表情で答える。

「いや、別に俺たちだけで探すわけじゃない。アキバの街に海外サーバーから遠征してきた奴らがいただろ？」

か・みは国内サーバーのプレイヤーとフレンド登録をしていないのは周知の事実。ならば海外サーバーのプレイヤーとフレンド登録をしている可能性に賭けようというのが直継の案だった。しかし《茶会》の解散と同時期に活動休止状態になった直継に対し、直継がログインしなかった2年間のエルダー・テイルの変化を知るシロエは断言する。

「いや、望み薄なんじゃないかな」

そもそも本人は他のプレイヤーと触れ合うことを嫌う性分である
とされ、どんな姿のアバターなのか、どんな職業なのかは全くわかっ
ていない。

言語の通じない地域も多い外国ともなればなおさらだ。

「そっかあ……個人的にはいいアイデア祭りだったんだけどなあ
……」

直継は肩を落とし、その場に膝を着いて呟いた。

北上

はじめまして

01

「……………やっぱり風呂は嫌いだな……………」

入浴によってHPが回復したのを確認して風呂を上がり、まだ濡れている部分が残る体を拭きながら脱衣場に戻ったか・みは、そのまま洗面所に向かって足を進める。

「……………でも、誰もいなくてよかった」

独り言を呟きながら、タオルの下から見える自分の体を少し見て目を細め、鏡の前に立つてもう一度ため息を吐く。バスタオルを細身の体軀を隠すように肩にかけ、そして肩にかかる長さの白髪混じりの茶髪は後頭部に束ねて、ゆっくり顔を横に振ってタオルを手に持つ。(まさかこれは現実基準とはね……………痛みがなかったからすぐに気付けなかった)

胸元から腹にかけて、体に付着している水滴を丁寧に拭き取る。タオルに隠れている腹の部分には、大きな傷跡が刻み込まれている。

「ばれないようにしなきゃ」

そして肌と髪を拭き終わり、ステータス画面を開いて衣服を身に付けた。

02

「はあ……………なんでこんなことに……………」

《木亭宿》の食事場のテーブルに突っ伏す猫人族の《吟遊詩人》、【あんまるん】はため息じりに呟いた。彼女は日本サーバー内でもそこそこの知名度がある中堅ギルド《Love On the Marine》のギルドマスターである。

「あんまさん、気を持ち直してくださいよ」

彼女もまたギルドメンバーの半数を引き連れて《アマミ》に訪れた際に大災害に巻き込まれた被害者の一人であり、クエスト攻略直後の

帰還中にこちらに来てしまった次第である。

「急にこんな目に遭うなんて誰も思わないでしょう?」

あんまろんはギルドメンバーからの声掛けに対しわずかに反応するが、少し顔を持ち上げただけですぐに愚痴を吐いて顔を隠してしまう。エルダー・テイルという見知った環境であつても、それはあくまでパソコン画面という媒体を介した虚構の産物。

突然世界が変われば精神的に追い詰められるのは当然である。

「【マリエール】ちゃんのこととは連絡取れたけどあの子たちアキバだしい……」

《ナインテイル》から南西に離れた島嶼地域、それもほとんど僻地へきちに等しい場所にいる彼女たちにとって、大災害後もフレンドリストの念ボイスチャット話を通じた連絡網が生きていたのは救いだったのだが、それでも「物理的距離」と「危険地帯」が障壁となり助けが望めないのは痛い。「ロンダーくんに至ってはガラの悪いコとつるんでるみたいで頼れそうにないし……もう最悪!」

彼女がフレンド登録しているプレイヤーたちはほとんどが《アキバ》や《ススキノ》現実の北海道札幌市すすきのと言った《ナカス》から離れた都市でログインしており、さらに大災害発生から半日も過ぎていないにも関わらず治安が末期の水準にまで悪化している場所もあるという。

混沌極まる状況に放り出された他人に、「自分が困っているから」と助けを求めるなどおこがましい。このようなネガティブな思考に辿り着くのも、今となつては合点がてん納得できてしまう。

「【ロンダーク】はもともとそういう奴。諦めてくりやれ」

「はあ……誰が予想できるかつつの」

「死ねばナカスの大聖堂で復活できると思うんだけど、自殺する勇氣なんてないわ……」

ギルドメンバーたちも完全に救助を諦めており、彼女たちの《ナカス》帰還は絶望的かと思われたその時。

一人の声をかける者の影が現れた。

「やあ、はじめまして」

あなたは何者？

03

不意に声をかけられたあんまろんたちは、目を点にして声の主の方へと視線を移した。見ればそこに立っているのは一人の男。レベルは最高値の90、メイン職業は《神祇官》、所属ギルドはなし。衣装は《神祇官》が装備できる防具の中でも超が二つ付くほどレアな代物で、HPの数値の高さからも実力者であることが一目で分かる出で立ち。これだけならただのトッププレイヤーで終わっていたのだが、問題は彼の名前である。

「二か・みいいい〜!?!」

何しろその存在自体が「伝説」と称されるトップ中のトップであり、そして話題に名前が上がる度にたちまち注目をかっさらってしまいう程の超有名人が目の前にいるのだから、その場にいた冒険者たちが驚くのも当たり前。

「おや、ぼくってやっぱり有名人？」

自身を前にして硬直するプレイヤーたちに対し、か・みは飄々とした口調で返す。対してあんまろんたちは突然現れた彼に釘付けになるばかりで、緊張のあまり声も出せない。これにはか・みも苦笑いを浮かべながら、

「……………ってこといいんだよね……………?」

と、呟く他なかった。もちろんあんまろんたちも狐につままれたような表情でか・みを名乗る男を見つめ、暫し場は静寂の空間となる。

(大きな声出しちゃった……………名前は同じだけどこの人本物……………だよな?)

食事場の隅の席で本を読んでいた魔女風のエルフの女は、手元の魔導書で朱色に染まった顔を覆い隠してか・みの様子を伺う。

(成り済ましじゃないよな?!本物だって言ってくれ!)

《武士》の風貌をしたドワーフの男は、興奮のあまり再び叫び声をあげそうになるのを堪えながら目の前の料理を勢いよく頬張る。

(嘘でしょ本物?!本物のか・み?!マジ?!マジなの!?)

あんまろんの隣の席に座る肌面積が多く布地の少ない衣装を纏うヒューマンの女は、当然だが初めて目の当たりにするか・みを前にして完全に気が動転しているのが分かる。

(俺は……夢でも見てるのか？もう何もかもが信じられないよ……)
驚愕のあまり転倒した猫人族ウエアキャットの少年も、立ち上がる気力もなく乾いた笑い声を出すことしかできない。

(え？……え!?)

そしてあんまろんもまた己の目を疑い、目の前に立つてこちらを見下ろす男を見つめている。

「……………大丈夫?」

か・みはその場にいる全ての冒険者にもう一度声をかけなおすことしかできず、この混乱が治まったのは十数分後のことだった。

04

か・みと相對したことで硬直していた冒険者たちが落ち着きを取り戻し、各々が状況の整理を終えた頃。詳細不明ながら伝説的な功績を持つ人物が目の前にいることに安堵する者、あるいは興奮者、あるいは更なる不安に震える者もいる。

「改めて……ぼくは本名土蔵将助つちくらまさすけ、今は【か・み】を名乗っているハーファルヴの神祇官だよ」

短い自己紹介をし、軽く頭を下げ「よろしく」と続ける。

「お、お初にお目にかかります!」

緊張で上擦うわすった声とたどたどしい口使いで挨拶をするのは、つい先ほどまで食事場の隅にいたエルフの女。鏢つばの広い帽子を目深まぶかに被り、切り揃えた長い前髪で目元を隠しているのも、恐らく朱色に染まっているであろう自分の顔を見られることを躊躇ちゅうちよしているのだろう。

「わっ、わ、私は【アルタナ】と申します!メイン職業は妖術師ソーサラーです!よろしくお願いします!」

アルタナは深々と何度も頭を下げながら席に座り、顔を背けて背を丸める。

「あんまろんです。Love On the Marineのギルド

マスターで、吟遊詩人の……」

あんまりも囁くような声しか出せず、自己紹介も途切れる。

「俺は……【心】。〴〵ころ〴〵って書いて……読みは〴〵しん〴〵。メインは武闘家でサブは……えーと……功夫」

ウエアキャット猫人族の少年も自己紹介を簡潔に終わらせてしまい、その他のプレイヤーたちも手短な紹介しかなかったためにも釈然とした結果となった。

「んー……状況確認は不要として、情報交換から始めようか。まずはぼくから、と言いたいところだけどその前に」

やはりと言うべきか、話題を切り出したのはか・み。

自分のフレンドリストには他のプレイヤーの名前が一つもないため、少なくとも自身よりは多くのプレイヤーと関わっているこの場の人物たちから情報を得た方が手っ取り早いのだ。だがここにあつて最年長なのも自分自身であることから、隗より始めよとばかりに話を進める。

「君たちの中に、今この姿になった後にモンスターと戦った子はあるかな？」

闘いの変異

「えっ?……あ、はい!アمامミ限定のクエストでダンジョン攻略をしたんですけど、その帰りに……」

何か情報を与えられると思った矢先の質問に、あんまろんは思わず素直に返答した。言葉尻で「しまった」と思い慌てて口元を隠すが、か・みは「いいよ」と少し微笑みながら頷うなずいて続ける。

「それで?生まれて初めて、アバターじゃなくて自分自身の身体で、モンスターを相手に戦った感想は?」

か・みの方を見る冒険者たちは彼が楽しげに問い質している様子に底知れない恐ろしさを感じ、さらに緊張する。

「か・みはただ者ではない」ことなど、自分たちがこのエルダー・テイルの世界に来る前から知っていたはずなのに、本物を見ると嫌でも確信できる。

「怖かった……その、本当にすごく怖かったです……がむしやらに逃げることしかできないくらい……」

Love On the Marineのギルドメンバーの一人、
「オールトIIアーザン」が声を震えさせながら答える。彼の脳裏には蛇型のモンスターが逃げ走る自分の真上から現れ、喉首に噛みつこうと跳躍した瞬間の記憶が再生されており、その時の記憶はトラウマになっているらしく呼吸も荒い。

「そう、怖いとか不安とか。初めて向き合うものから逃げたいって思うのが、普通の人間の感覚だよ」

か・みはその通りとばかりに首肯し、オールトは小さく息を吐いて椅子の背もた凭もたれに背を着けた。今までパソコンの向こう側のアバターが戦っていたものだった存在が、生身で相対して戦わなければならぬ相手になるという事実は実際に腰が抜ける程の恐ろしさと言うことだろう。

「逃げる途中で戦ったのなら、技を使うのにコマンド操作をしたのかな?」

自分のステータス画面を操作しながら、さらに問いを続ける。

あんまろんと彼女のパーティメンバーはごくごくと頷き、他の冒険者たちは首を傾げた。

「パニック状態でまともなコマンド操作なんかできやしないわ……」

《付与術師》の法儀族の女性が答える。こちらは味方全体の攻撃力強化の魔法を選んだつもりが、パニックのあまり敵全体の拘束の効果を持つ魔法を繰り返し選択するという失態を犯していた。

「コマンド操作に関してはターン制じゃないから尚更難しい案件だね。戦闘中にステータス画面を操作するなんて、ただでさえ視界が狭くなるのに効率が悪すぎる」

戦闘時のコマンドメニューもパソコンの画面にまとめて表示されているのであれば、敵と自分と味方の姿、そして各自の現在の状況を一目で確認できるので大きな支障はない。

そして何よりエルダー・テイル自体がパソコンゲームと言うこともあり、マウスとキーボードを介した手指の動きだけで大部分の操作が可能なため、原則として基本操作の更新頻度が少ないことが最大の特徴として認知されている。

「でも実際のところは、技を使うのにコマンドを操作する必要がないかも知れないんだ」

彼の口から飛び出した言葉に一同は目を見開いた。

「おい、それ………本気で言ってるのか?」

ドワーフの男が勢いよく立ち上がってか・みを指差し、すぐに我に振り返りその手を震わせながら問いかける。コマンド操作なしで特技や魔法を使えるのなら、なぜ今まで思い浮かばなかったのか。

多く創作物に触れる機会がありながら、なぜ気付かなかったのかと生身でのモンスターとの戦闘を経験した冒険者たちは自問する。

「実際に試していないから確証はないけどね」

「コマンド操作なしでの技の発動」が可能か否かはまだ分からない。彼は口から出任せを述べられるほど狡猾くはないし、しかし思い付きで嘘を吐くような男でもない。

どうせまだ試していないのだ、結果など後で確かめれば良いだけのこと。

「だからさ……ちよつと狩うりに行いつてみようか」

思案

大胆不敵、あるいは無邪気とも解釈できるにやり顔を浮かべ、目の前で自分に視線を注ぐ十七人に向けてそう言い放った。

「戦う……？」

「戦うって言われても……」

「まさか今からですか？」

か・みの宣言にプレイヤーたちは呆気にとられ、そして最初に口にしたのが困惑の言葉であることから、気の進まない提案であることは明白である。まずほぼ全員が初対面で、戦闘スタイルも異なり、しかも現実での実戦経験は皆無で、レベルに至っては最高でも75、最低が40と開きが大きくあまりにも中途半端な有り様だ。

加えてこのエルダー・テイルにあつてベテランと呼ぶべきあんまろんたちですら生身で相対したモンスターに恐怖を抱き、まともな抵抗さえもできないまま安全地帯まで逃げ帰って来た事実がある。

(この人……掴み所がなくて……怖い……)

この場にいる全てのプレイヤーたちがモンスターとの戦いを恐れているのは確かだが、その中でもアルタナが恐れているのは何もモンスターばかりではない。ここまでのやり取りでか・みという人物にもまた恐怖を覚えていた。

考えても見れば、「自身は有名」だが「自身の詳細を誰も知らない」という致命的な欠点を抱えた状態である。にも関わらず、初対面であるはずの自分たちに対して裏表のないように見える態度で接する。『積極性』は、不自然極まりない。

これまでの「ソロプレイヤーとしてのプレイスタイル」を根本から否定する行動であり、騙し討ちなどを警戒するのは必然であると言えよう。

「まだ明るいうちの方が安全に腕試しをできるからね」

両手指を組んで掌を真上に向けてるようにして腕を伸ばすと、ゆっくりと立ち上がって再び手を下に下ろす。この間も視線を逸らすことなく、まっすぐにあんまろんたちを見ていた。

「本当は今日のうちにイヤクに行きたかったんだけど、君たちも目的地はナカスでしょ？」

目的地が同じであることなど、この場にいる全員が理解していた。しかし予想もできない異常事態に巻き込まれたことによる混乱と、右も左もわからない世界での今後の不安からくる躊躇ためらいから、思いきつた行動を起こせなかったのが現状である。

だからこそ街という安全地帯の外に出る選択は避けたいというのが本音。

「でも……」

「大丈夫。まずはモンスターに慣れなきゃね」

しかし「何があっても安全だ」ということをアピールするかのよう
にウインクするか・みの顔には、確信に近い自信の色があった。

(……………怖いけど、なんだろう……………この人なら信じられるって思える)

あんまろんたちはいつの間にか、その表情に浮かぶ絶対の自信に僅かながらの可能性を賭けてみようと思っていた。根拠がある訳ではない。ただ目の前に伝説的な存在と思われる人物がいて、彼が自分たちがするべきことを定めて促している。

ただそれだけのことなのに、不思議と勇気が沸き上がって来る。もちろんか・み本人に対する畏怖と恐怖がなくなった訳ではないが、少なくとも信頼はできる。

(どうせ地球に帰る方法なんて分からないんだ……………やってやるさ)

騙されているかも知れない。利用されているだけかも知れない。だが、親しい人物の多くは遠く《アキバ》の街にいる。今は遠くの親戚より近くの他人の他に頼りはない。

決意が定まれば、決断は早かった

「不安だし、怖いけど……………やるだけやってみます」

一人が溢した言葉に、か・みはただ一言。

「それじゃ、始めようか」

指南

01

鬱蒼うつそうとした森の中を、十八の影が列を成して進んで行く。先頭を進んでいるのは神主を思わせる装束の男、その後ろを追うのは鎧やローブなど、およそ統一性のない雑多な衣服を身に纏まとう男女。

「なあ、大分歩いた気がするんだけど……」

列の中心に近い位置を歩く心は、周囲を見回しながら先頭を行くか・みに問いかける。ここまで一度としてモンスターと遭遇してないからだ。

「うん。一番安全なルートを選んだから」

一度背後に振り返り、澄すました表情で答える。か・みとしても下手に難易度の高いルートを通って味方を減らしたくはない。それゆえの選択である。

だが一同は疑問をもう一つ抱えている。

「あの……情報交換の件は……?」

「正直に言ってもどうでもよくなっちゃったから自分で確かめることにするよ」

この答えが全て。やはり信じ過ぎてはならない人間だと思い知ったプレイヤーたちなのであった。

02

地上を這う木の根と小さな草花に彩られた道をひたすら歩き続け、一行は遂に目的地に到着する。

「ここ一度止まって」

時刻にして午後5時30分頃、か・みと彼が引率するプレイヤーたちの姿は《ナゼの街》から2km程度離れた森の中 央付近にあった。日はすでに傾かたむいて紅あかい輝かがやきを放っており、橙だいたい色に染まりつつある空には半月が見えている。

「ほら、あれが見える?」

か・みが指差す先の開ひらけた草原くさいはらには、平均15レベル程度の比較的

弱い蛇型モンスター「リトルマンバ」が十匹程度の群れを成しているのが見える。

あんまろんと彼女のパーティメンバーは後退りし、他の者は身震いしながら固唾を飲む。

「マジか……パソコンでやってた頃は何とも思わなかったが、生で見るとやっぱやべえな……」

呟いたのはドワーフの《武士》「加瀬切政」。初めて目の当たりにする本物のモンスターたちを目の前にして、2mを優に越える身の丈にも劣らぬ大太刀ががちやがちやと音を発する程に体を震わせ、全身から冷や汗を滴しながら歯を食いしばっている。

「落ちついて。君と相手とのレベル差は50だから、冷静に急所を狙えば通常攻撃でも一殺だよ」

甲冑越しに切政の肩を叩き、後ろの者たちにも目配せをして緊張を解そうと声をかけるが、やはり恐怖心があるのか座り込んで膝を抱え込む者もいる。

膝を抱える女を見てか・みは仕方がないと溜め息を一つ吐き、彼女と向かい合うようにして立つもう一人の施療神官の少女に声をかけた。

「【アンネ】ちゃん、切政くんとペアを組んでくれる？」

アンネはいきなり指名されたことで困惑しつつ、運動による体温の上昇で少し頬が赤く染まったままこくこくと頷いて切政の隣まで移動する。

自らの目の前に並び立つ二人に対し、両者の装備を見て指示を続ける。

「まずは、ぼくが手本を見せるからね」

目を閉じて深く息を吸い、〃小太刀〃
☒朱鷺雛☒の柄に手を添え、左足を後ろに退いて備える。その場の全員が緊張しながら見守る中、か・みは移動先へと意識を定めて前傾姿勢をとり一度息を止める。

「【飛び梅の術】」

小さく呟いたその瞬間に姿が消え、モンスターの群れがいる草原のど真ん中に現れた。この事実には一同は驚きを隠せない。

（嘘だろ!? コマンド操作無しで技が使えるってマジなのかよ!）

心は少し先の広場で繰り広げられる戦闘の様子に戦慄する。通常攻撃で斬り付けると見せかけ「勾玉の神呪」で倒し、その直後に「露払い」で後ろから近付く敵を遠ざけたかと思えば、今度は「竜口の流水」で二匹同時に絶命させる。

その後一匹、更にまた一匹まさに流れるような彼の動作は、野獣の如く荒々しい。その荒々しく芝居掛かった蹂躞劇は、60秒と待たずにあっさりと終わった。

「……………いきなりあれをしろなんて無理難題は言わないよな?」

「目下の目標はモンスターと戦うことに慣れることだからね。ぼくの真似をするなんて無茶は許さないよ」

か・みは切政がやつと紡いだ言葉を即座に否定し、プレイヤーたちは安堵の溜め息を吐く。一方のアンネは手に握る祈棍メイヌに力を込め、緊張を和らげようとするが息は荒くなるばかり。

しかし何故か恐怖心は薄れてゆく。隣を見ても少し顔を強張こわばらせ、切政が立っているだけなのだが、不思議と安心感を覚えてしまう。

「次のモンスターが現れる前にアドバイスを一つ教えるよ」

アンネと切政の間を抜けて草原の方へもう一度近付くと、か・みは全員に向き直って一言告げる。

「コマンド操作無しで技を使う時は、この技を使う」と念じながら動作をすること。動きは大雑把でいいから、冷静にね」

言葉を切ったか・みの目には、やはり溢れんばかりの自信が浮かんでいる。後ろを振り返ってモンスターがリスポーンしたのを確認すると、早速切政とアンネに促す。

「レベル差があるから大丈夫だと思うけど、ぼくが危ないと判断したら必ず助けるから」

「お……………おうっ」

「……………はい……………頑張ります!」

答える二人の肩を力一杯叩き、喝を入れて送り出した。

素人たち

03

(イメージと動きが大事……)

切政きりまさの後ろを歩きながら、アンネはか・みの言葉を心中で復唱する。「凄腕せいぶんのソロプレイヤー」であることと名前は知っていたが、有名だから知っているだけで今回が初対面であり、しかも功績以外の詳細が一切不明の人物。

怪しいとしか言えない人物の言葉を安易に信じていいのだろうかと不安を募つらせつつも、今頼たよりになるのは彼一人だけというのも事実である。

(加瀬かせさんの足手まといにならないようにしなきや……!)

アンネの前を歩く切政きりまさもまた、一握いちあくの不安と一抱ひとかかえの怖おそれを胸に思案を重ねていた。

(念じながら動作をする……つまり動きを絶やさず、常に次の一手を考えながら行動しなきやならねえ……)

今回相対するモンスターと自分とでは、攻撃力と防御力に雲泥の差がある。か・みもまた「冷静な状態なら通常攻撃でも十分倒せる相手」と評しており、おそらく間違いはないのだろう。

(つまり、遠回しだが油断するなど言ってるんだ)

何気なにげない日常生活でさえ、一つのこと集中し過ぎればその分他の行動に遅れやズレが生しじて何かしらの失敗を起こすことになる。

まして今回行おこなうのは生物を相手取つての戦闘であり、文字通り生まれて初めて経験すること。バックアップがあるとは言え、失敗すればただでは済まない。

(アンネって言ったっけか……足引つ張らないように気を付けなきやな)

決意したように大太刀の柄つかに右手を、鞘さやに左手を添えて水平に構え、少し早足になって草原くさほらへと進んで行った。

04

後方に控ひかえて自分たちの順番を待つ一行は、モンスターの群れに向

かう二人の後ろ姿を見守りつつ、言い表し様のない不安感を内心に抱えながらか・みに視線を移す。

「あつ、えつと、あの！か・みさん！」

アルタナが上擦うわすった声で話しかけるのを、か・みは掌を向けて諫める。急に聞こえた声に立ち止まって振り向いた切政きりまさとアンネに、心配が不要であることを伝えるように大きく手を振り、二人が再びふたたび歩き始めたのを見送ると改めてアルタナに言葉を返した。

「分かっている。どうして初対面同士でペアを組ませたのかを知りたいんでしょ？」

ステータス画面から「パーティー編成」と書かれた枠を選び、二人組パーティーが標示されたウィンドウを8組出現させる。そしてその中から「第一組」と書かれたウィンドウを選ぶと、パーティーメンバーの情報が簡潔に表示される。

「加瀬切政 ドワーフ 《武士》」

「Lv. 65 HP. 7015 MP. 6918 《鬼島津》」

「アンネ 狐尾族 《施療神官》」

「Lv. 47 HP. 3249 MP. 4091 《Love O

n the Marine》」

上から名前、種族、職業、現在のステータスと所属ギルドの順に文字が浮かんでいるのを確認し、か・みは続ける。

「ド素人同然の自分の勤に任せただけ。大学中退してからもう20年以上他人と関わってないから……」

放った言葉に対する呆れのあまり、その場にいる全員が「は？」としか答えられない。

「……………お前、すげーのに残念なやつだな」

誰かの呟きは、そよ風に掻き消された。

壁を壊す その一

その頃の草原では切政とアンネが12匹のリトルマンバを相手取り、今まさに戦闘が始まっていた。リトルマンバたちは一斉に鎌首を持ち上げて牙を剥き出しにし、シャーッと威嚇音を響かせて二人を牽制しており、対する切政はアンネの視界に死角を作らないよう前傾姿勢で居合の間合いを測り、彼の立つ位置から3メートルほど後ろに陣取るアンネは、悩みながらも「サンクチュアリ」をコマンドから選択した。

(落ち着け……コマンド操作なしで技を使うだけだ……)

他方、切政は威嚇を続ける蛇を相手に姿勢を崩さず、自分がこれから使う技のイメージを現実の体の動きに重ねて刀を抜こうと手を動かす。その動きを好機と見たのか、最初に行動を起こしたのはモンスタ―だ。

「っ……〔疾風薙ぎ〕……………!」

リトルマンバの一匹が自分自身の喉首を目掛けて噛みつこうと跳躍した瞬間、一瞬臆して避けそうになるも足を踏ん張って持ちこたえる。そして……

「一文字」!

掛け声とともに目にも止まらぬ居合い抜きが放たれ、モンスタ―が一匹泡となって四散した。思わず「やった」と足を止めそうになるが、残る11匹もの敵を前に隙を見せるわけにはいかない。

すかさず特大の太刀を上段に構え、正面から飛びかかって来る蛇三匹に向かって斬りかかる。

「嵐打ち十文字」!

まず縦一文字を描くように勢いよく刀振り下ろし、顔に飛び付こうとしていた一匹を両断。続いてそれぞれ肩と喉に攻撃しようとする二匹を、左から右へ横薙ぎに切り払って倒す。これで残るは七匹。

ここまでは切政が優勢で、およそ大きな失敗は見られない。しかしアンネの安全を確保するべく、元いた地点への移動のために振り返った瞬間、その隙を吐いたりトルマンバの一匹が首筋に噛みついた。

「うおっ!?このっ!」

近付いて来るモンスターたちを刀を振り回して牽制し、同時に左手を背中側に伸ばして蛇を引き剥がそうとする。

この時の噛み付きと継続ダメージはすでにHPを200ほど削っており、すでにリトルマンバの毒に侵されていることが分かる。

「切政さんっ!」

アンネは切政がリトルマンバに噛み付かれた瞬間を目の当たりにし、初めて自身のサボタージュに気付き、慌てて魔法を発動した。

「サンクチュアリ!」

レベルこそ低いながらもギルドメンバーとして大規模戦闘に駆り出されていただけあり、アンネ自身はこの手の戦闘に慣れているという自負がある。だが味方が一人しかいない中範囲内の味方の防御力上昇と引き換えに、自分の動きを大幅に制限してしまう「サンクチュアリ」を選んでしまったのは致命的な判断ミスであった。

「襖ぎの障壁」

他の個体と戦う切政を無視し、自身に迫るリトルマンバに対処できなかったのだ。動けないまま真横から喉に噛み付かれる寸前のところでか・みに助けられ、障壁に阻まれたことで動きを止めたモンスターは切政に倒される。

「使う技は何となくで選んじやダメ。悩む暇があつたら状況をもっと良く見て考えて」

か・みは短く説教し、二人の安否の確認を終えると草原から姿を消した。

壁を壊す その二

か・みの姿が消えると同時に「襖みそぎの障壁」も消滅し、その場にいる人間は再び二人となる。モンスターの攻撃に対処できず助けられてなお放心していたアンネは、か・みの言葉を無意識のうちに復唱してやっと我を取り戻した。

そして何かを確信したように頷うなずいた後、先ほどまで迷いに迷っていたことを忘れるかのように切り結んだ表情で改めて正面に向き直る。脱力したことでだらりと下がった左手で握っていただけの祈棍メイを、今度は両手で持つように構え直し、自らを背にしてリトルマンバとの間合いを測る切政きりまさへと狙いを定める。

（さんざん迷った挙げ句に何となく選んだ「サンクチュアリ」……さつきはこれで失敗して、か・みさんに助けられた）

切政は毒のバッドステータスを被こわむったことで継続ダメージを受けしており、HPが少しずつ削られつつある。もちろん彼を責める気など毛頭なく、全ての責任は自分にあることなど自覚しているし、もう同じ失敗を繰り返す訳にはいかないことも留意している。

ここはエルダー・テイルではなく、パソコンのモニター越しにアバターを戦わせるのではない。ここは現実で、モンスターと戦うのは自分自身。失敗は許されない。

（だから、今度こそ成功させる！ 枷かぎにならないように！）

ゆっくりと目を閉じて祈棍メイを高く掲げ、祈るような姿勢をとって満身の意識を込める。察していたのかただの勘なのか、彼女が特技を使おうと事前動作をすると同時に切政も後ろへと飛び退のき、自分たち二人を囲むリトルマンバの群れからアンネを守るように大太刀を構え直す。

「浄化サンライトクリナーの陽光」！

アンネは切政が再び地面を踏み込むのを合図に、かっと大きく目を開き祈棍メイを地面に突き立てた瞬間、祈棍の先端から眩まぼゆいばかりの白い光が放たれた。

彼女が放った「浄化サンライトクリナーの陽光」は自分を除く味方一人の状態異常を完

全に取り除き、さらにその後3分の間攻撃を一回当てる度、与えたダメージ分の10%ずつのHPを回復する効果を持つ支援魔法である。

僅か20レベルという極めて低い段階で覚えられる初心者向けの特技だが、大規模戦闘での使用を前提に作られているためにベテランのプレイヤーほど使用頻度が多い。切政のステータス状況を自分の目で確かめ、最善と判断し選り取り取った一手だ。

「助かるぜ！」「疾風薙ぎ一文字」！」

遅れに遅れたが、的確な支援を受けたことでHPの減少が止まったのを確認し、攻撃を再開する切政。残る敵は6匹になり、アンネも積極的に行動を起こすようになった。

迫るリトルマンバの一匹を通常攻撃で倒し、二匹目の攻撃は回避。切政の後ろに回ったモンスターは「ヒーリングフォージ」で打ち倒す。

そして切政は残ったモンスター全てを通常攻撃で撃破する。

「二組目終わり！お疲れ様」

最後のリトルマンバが空に散ったのを合図に、二人の耳にか・みの声が響いた。

幕間 Deva Akasha

か・みたちが訓練をしている《蛇神島アマミ》からはるか北東に離れた《アキバ》。プレイヤーズタウンとも呼ばれるこのアキバにおいて、まさしく「街の顔」と呼ぶべき施設《アキバギルド会館》の一室に設えられた会議室。

その内部には実に200人超もの男女が集まり、皆緊張した面持ちで長机を挟むように並べられた席に座っている。そして時計が午後0時を示すと同時に、入り口に向かって座る《召喚術師》が立ち上がり全員に一礼し、言葉を述べた。

「これより、我ら《Deva Akasha》調査班による調査発表を始める」

人間の召喚術師、【ヤマ】の宣言を合図に一同が立ち上がり彼に向かって一礼、そして全員が同時に席に着く。

「今回の題目は他でもない。今日の正午に発生した、今我々がここにいる原因である『アサーマニー・アパダ』に関わるものだ」

ヤマは各々の席に並べた資料に目を通すよう促し、自身も資料を手で説明を始める。

「時間不足とモチベーションの問題で調査範囲はアキバ内とその周辺半径2km以内に留まったが、今回の簡易調査で分かったことは大まかに分けて二つある」

ヤマが指示していた調査の結果の内、まず一つ目に判明したのは「アキバの周辺では大きな変化が確認できないこと」。今回の拡張パッケージであるノウアスフィアの開墾の内容を捕捉すると、「1. 新モンスターの追加」、「2. ゾーン追加」、「3. 新イベント、新クエストの追加」、「4. レベル上限の更新」、「5. 特技、スキルの追加」の計五つに渡る大規模なシステム更新が実施済みである。

この内「アキバ周辺の変化」に該当するのは1、2、3であり、調査範囲が狭すぎたことで新モンスターは発見できず、同じ理由でゾーンにも変容らしい変容は見られず、アキバギルド会館で新クエストの存在は確認できたものの、内容の詳細がなく発生条件さえも分からない

い状態。

そのため「現状は拡張パック導入前と実質的に変化なし」という結論に至ったと言う。

「意見よろしいでしょうか」

一つ目の報告を終えると同時に豪華な鎧を纏う法儀族イレスミの青年が拳手し、その様子を確認したヤマが手を向けて起立を促す。青年は小さく頭を下げると、椅子を後ろに引いてゆつくりと立ち上がりヤマに自身の意見を述べ始める。

「今回のアップデートで新しく追加されたモンスターやゾーンがアキバ周辺で確認できなかったことということは、システムの更新はまだ始まったばかりであり、現在は拡張パッケージの適用準備期間であると認識するべきではないでしょうか？」

つまりゲーム内容の更新情報が発表されているにも関わらずその結果が確認できないのは、まだアップデートを施行しただけであり内容の反映に至っていない状態。要約して例えるならば「飲んだ薬がまだ効果を出していない」とするべきであろうか。

「なるほど。要するに拡張パッケージの内容の一部は既に実行されているが、他の内容が何時実行されるのかが分からぬと。可能性は低い。が理由としては納得がいくな」

ギルドの幹部おほと思しき狼牙族ウルフヘアの老人がうんうんと頷きうなず、他のメンバーも納得したように各々声をあげる。

「だが今儂わしが “可能性が低い” と言った通り、この “アサーマニー・アバダ”並みならざるに巻き込まれてからまだ半日と経たっていないことを忘れてはならぬ」

老人がぴしやりと言いつつと場は水を打ったように静まり返り、ギルドメンバーたちは再び背筋せすじを正す。青年も彼に合わせ、警告ともとれる言葉を続ける。

「はい。ノウアスフィアの開墾が実施されたのは今日ですが、この拡張パック導入に伴って発生した世界の変化はまだ二つだけ……」

アップデート時にログインしていたプレイヤーが一人残らずエルダー・テイルの世界に転移したと、エルダー・テイルの世界にお

ける時間の流れが現実世界の地球と同じになったことだ。

更なる調査を進めなければ詳細を知ることができない以上、組織以上の単位での行動が求められるのは必定と言える。

「もう一つは安全地帯の範囲内の戦闘行為に関して」

衛兵は都市などの安全地帯で戦闘、または戦闘行為に準ずる行動をした時にのみ出現する特殊なNPCで、その役割は「戦闘禁止区域で戦闘を行ったプレイヤーの排除」である。

全身を覆う独特なデザインの鎧兜は強い威圧感を醸しており、さらに冒険者の装備品を大きく上回る性能を持つ武器と極めて高い数値のステータスを誇っており、出現した際の絶望感から「処刑人」や「監視者」などと揶揄されている。

「極めて重大な案件だ。衛兵の出現条件が、ノウアスフィアの開墾を導入する前と比較して……：……：明らかに緩和されている」

どよめきが広がる。より詳しく説明すると、これまで戦闘禁止ゾーンでは「通常攻撃」の動作や「攻撃コマンド表示」など戦闘に直接関わる操作をした時点で衛兵が出現し、「戦闘行為の中止と退去」を求める警告メッセージがパソコン画面に表示されていた。

当然ながら再度通常攻撃を実行したり特技を使用するなどすれば、警告無視と見なされ強制的に排除される。要するに武器を構えた時点で脅威と見なされるということになる。

「緩和されたと言うのは、具体的にどういうことですか？」

「簡潔に言うなら、「直接かつ明確な傷害」が認められない暴行が衛兵出現の対象外になってしまっている」

さらに詳細に説明すると「拘束」やダメージを受けない程度の「殴打」、建造物や周辺の人物に被害が及ばない程度の「投石」では衛兵が出現しない。さらには装備した武器を「他人に向けるだけの行為」すらも戦闘行為の対象外であり、衛兵の出現条件に達しないという異常としか言い様のない有り様だと言う。

「これでは、やはり……」

表すならば不安。この一言に尽きる。

「ああ。早く対策を採らなければ、治安は悪化する一途だ」

星

二人組七組、三人組一組の計八組のパーティーに分けられ、その各々が一通り実戦を終えて町に戻った頃。太陽はすでに地平線の彼方に沈み、見上げれば夜の帳が空を覆っていた。

微かな淀みさえもない限りなく澄んだ空気、雲ひとつない夜空を彩る煌々とした青白い星の光。今となってはなかなか見られない幻想的な光景は、実に美しいことこの上ない。

「……夜空ってこんなにきれいだっただね」

町から少し離れた小高い丘の開けた場所に筵を広げ、りくじんちよくばん 六壬盤かんがいぶかと大八洲山海図おおよしまさんかいずを使って翌日の吉凶を調べるか・みは、感慨深いとでも言いたげな表情で呟く。

「……か・みさんよ……」

「今は本名で呼んで欲しいんだけど……」

星空と地図を交互に見ながらちよくばん 盤を動かすか・みの隣に座り、これまたろくじゆうしけず 六十四卦図ろくじゆうかんしと六十干支の羅針盤らしんばんを用いてヤマトの地図と睨み合う《森呪使い》の男が一人。

「ああ、悪い。将助お前、まさか引きこもりニートってやつ？」

「そうは言っても、大学を退学したって言った時点で普通分かるでしよ」

らしんばん 羅針盤の針が指す方角に合わせ、地図上の《蛇神島アマミ》の部分に六十四卦を翳しながら吉凶を占う男「サツチ S u t c h ☆」が問いかければ、か・みは何の偽りも繕いもせずいっかわ に答える。

彼の返答を聞いた サツチ S u t c h ☆ はエルフ特有の尖った耳をだらりと下へ向け、呆れたように溜め息を吐き作業を止めてメモを取り始めた。

「……事は《茶会》の【にゃん太】と同じく中年のおっさんだよな？」

がっかりした様子で茶化すように問いかけるが、当の本人には サツチ S u t c h ☆ の発言にピンとこない様子で首を傾げる。実年齢が中年なのは事実なので否定はしないが、問題は彼が口にしたプレイヤーの名前。

《放蕩者の茶会》自体はその知名度の高さから存在は認知しているし、《茶会》メンバーの名前もその詳細こそ知らないものの過去に攻略したクエストの攻略者名簿に記載があるため、当然ながら知っている。

しかしなぜここで、話題とは無関係な人物の名前が飛び出すのかが理解できなかった。

「何でにゃん太が出てくるの?」

「いや、確かににゃん太もあんたと同年代だったなーって思い出してさ。それで言っただけだ」

メモを書き終え、吉凶占いの続きをしながらか・みの問いに答える。

しかし、地図の上に置いていた六十四卦図を持ち上げた瞬間、作業を遮るように声を掛けられた。

「嘘」

か・みは北斗七星を指差し、次いで北極星へと少しずつ指し示す位置をずらしながら続ける。

「その様子だと……現実でもエルダー・テイルでも相当仲が良いみたいだね」

「ありや、もうバレた」

一本取られたと笑う S u t c h ☆ と羨ましいと言いたげに微笑むか・みは、しばし占いを中断して雑談に興じる。

天の川は見えないが、夜が更けてもなお空は輝いていた。

航海 魘夢

01

翌朝。とは言ってもまだ空が暗い時間帯。《ナゼ》の町にある宿、《木亭宿》に泊まる十八人のプレイヤーたちの一人であるあんまろん……否、広尾千比呂は、滝のように汗を垂らしながら布団を蹴飛ばすほどに魘うなされていた。

(おがぁーさぁーん……)

夢に見るのは幼き日、エチオピアでの記憶。母であったモノの成れの果てにすぎり付き、泣きわめくことしかできない自分の姿。まだ物心が付いたばかりの彼女に有あらん限りの罵声を浴びせ、母の亡骸なきがらから引き剥がす黒色の肌の男たちの姿。

そして母の亡骸なきがらを踏みつけ、ナイフを突き刺す男たちと同じ肌色を持つ女たちの姿も、ありありと思い出され、そして今、見ている。

(《k i k o m u n i s t i, k u f a !》)

その残虐ざんげつ極まる行いは、およそ人ができることとは思えなかった。やめて、お母さんを殺さないで。心に思うことはできても、言葉に出すことはできない。

踏み潰され、切り刻まれ、やがて肉片へと変貌していく母の姿に、当時少女であった千比呂ちひろは生まれて初めての絶望を知った。

(おかあざあぁーん！)

嗚咽交じりの声で母を呼べば、自分を地面に押さえつけている男たちから「うるさい」と頬を打ぶたれた。

涙ながらに暴力を止めるよう頼めば、「ふざけるな」と罵ののられた。

言葉も話も通じない、一方的な虐待が彼女を襲う。何故自分がこれ程までに酷ひどく惨むじい目に遭わなければならぬのか……そもそも、何故ただの子供である自分が見ず知らずの異国の地に居なければならぬのか。

悪夢に耐えかねたあんまろんが、荒い息使いとともにベッドから飛び起きる。カーテンで覆われた窓を見れば時間帯はまだ夜が明けた直後であり、ギルドメンバーを含めたプレイヤーたちは昨日の疲れがまだ残っているのか、暢気な表情でぐっすりと眠っている。

彼女ら彼女らの寝顔を見て安心しきったあんまろんは、緊張がほどけた面持ちで長く、大きく息を吐いた。

「あははっ……………何で今さら、あの時のこと夢に見るんだろう……………」

人伝の話やこの世界に来る前に調べたネット情報を思い出してみれば、千比呂の母は政に関わる人間だった。

一口に政治家と言っても彼女の母は立法を司る国会議員であり、さらにその議員たちの中でも特に嫌われ者として煙たがられていた政党に所属していたのである。

「汗べったべた……………お風呂で流さなきゃ」

ベッドを降りて風呂場に向かう間も、思い出すのは夢の内容と幼い日の記憶ばかり。その時は悲惨な経験をしたが、幸運にもその出来事があったから一週間と待たず、母の亡骸ともども助け出されたことも鮮明に覚えている。

故郷である日本に向かう船に揺られながら母の知人から聞かされた話。そして直近の出来事で幼いながらに思い知った。母の所業、政党の目的、人間の醜悪な本性。

「……………中学にあがるまで何もかもが憎かったなあ……………」

母は平和主義に基づいて世界平和を訴える活動家でもあったが、その平和を実現するにあたってまるで現実味の無い、それこそ子供でも「不可能」と理解できるような机上論ばかりを振りかざしていた。

廊下を歩きながら母から聞かされた言葉の数々を思い出せば、呆れよりもまず嘲りの言葉が連想される。「自分が他人に対し一切の干渉をせずとも、自分を攻撃の対象として襲って来る他人などいくらでもいる」の実例を体験した彼女にしてみれば、「例え話が通じない相手と相対しても、絶対に『対話だけ』で解決しよう」と抜かしていた母の

思想が馬鹿馬鹿しい。

(ゲームなんてなおさら話が成立しないし……何で私こんなに暢気に構えてるんだろう……)

気付けば脱衣場で一糸纏まとわぬ生まれのままの姿になり、風呂場へ繋がる横引きの扉を開けていた。静かな風呂場で温あたたかい湯気が漂ただよう中、千比呂ちひろはなおも記憶を辿る。

自分が帰国してからは大きな事件に巻き込まれることはなかったが、やはり世間からは思想的嫌悪感から冷ややかな目を向けられた。特にその頑固な思想が原因で自滅した母への非難は凄まじかったが、これは気にならなかった。

だが同年代の子供には敬遠され、その子供の親たちからは事ある毎に愚痴を聞かされることが増え、そんなストレス満載としか言い様のない生活が中学生になるまで続き、限界に近付いた頃。

(ま、悩んでる暇なんてないよね)

彼女はエルダー・テイルと出会った。湯桶に湛たえた湯を浴びながら、初めてエルダー・テイルにログインした日の感動を思い出す。

母の思想を否定してくれる、愚かな母が遺した呪縛を忘れさせてくれるものを手に入れた。

「お母さん、今私は暴力が肯定される世界にいるよ」

ちようど、太陽が水平線の果てから顔を出す。大災害を迎えて最初の朝が、《セルデシア》に訪れた瞬間だった。

アキバの施療神官（クレリック）／船出前

01

「大災害」から一夜明け、ノウアスファイアの開墾の導入日から二日目の朝を迎えた《アキバ》の街。この街の顔と呼ぶべき施設《アキバギルド会館》の一室に、一人のエルフの女性が居る。

「ああ、今後どないしよう……シロ坊とは直接会えたからええけど、他の子おらがほんま心配やわ……」

その女性は浮き足だった様子で部屋を歩き回り、自身の知人たちの安否が分からないことへの不安を吐露する。

彼女の名は「マリエール」。アキバを拠点とする小規模ギルド《三日月同盟》のギルドマスターであり、今回の大災害に巻き込まれたプレイヤーの一人。

そして部屋のソファには同じく大災害に巻き込まれ不安に苛まれているであろうにも関わらず、そわそわと落ち着きのないマリエールの傍に寄り添うようにとても世界観に合わない眼鏡とスーツ、タイトスカートかたわらを身に付けた女が、厳しい表情で眉一つ動かさず座っている。

「なあ、〔ヘンリエッタ〕。タベからあんまちゃんが全然念話に出てくれへんのやけど……」

おろおろと目に見えて焦りが見える様子でソファに座るヘンリエッタに話しかければ、振り返る彼女もまた物憂げな表情で答えた。

「大丈夫だとは思いますが……が……私も心配です……」

同時に溜め息を一つ。この世界に閉じ込められてからまだ一日目。否、既に一日が経過した今、行く先見えぬ状況に不安は募るばかり。しかし街には何時敵になるか分からない同じくこの世界に捕らわれたプレイヤー、更に街の外には人を見境なく襲うモンスターという二重の障壁が待ち受けている。

下手な紛争地域よりも遥かに危険な人口密集地と化したこの《アキバ》にあつては、如何に90レベルというベテランであつてもとても行動を起こす勇氣などない。

「……………ほんまに、こがな時どうすればええんやろな……………」

マリエールがヘンリエッタの向かいに座り、再び溜め息を吐いた時、独特な音楽とともに小さな画面が現れた。

画面に表示されていたのは、昨日一度だけマリエールと連絡を取ったあんまろんの名であった。

02

「集まったな？出港前に航路の説明をしておく」

時間は遡り、早朝のヤマト南西部。《蛇神島アマミ・ナゼの港》に停泊している私用船プライベートボートの一室には、か・みを臨時のリーダーとした計18人のパーティが集まっている。18人のうち二人は部屋の奥に置かれた黒板の両脇に立ち、残る16人は黒板と黒板に張り付けられた地図へと視線を向けて座っている。

「詳細は追って説明するが、まずこの航路は昨夜の星占いで決めた」
Such☆は、自分とか・みが昨夜の占いの結果に基づいて試行錯誤し、最終的に最善の結果を示すと予測した航路を地図上に引く。

その線は《ナゼの港》から延び、東から西へ弧の字を描いて《雨林島ウーベルフェルセン》現実の鹿児島県悪石島で一度止まり、丸印で囲み「一日停泊」と書かれた。そして《森林島イヤク》を無視して南を進み、《神代島ジャクセア》現実の鹿児島県種子島の南端にさらに丸印。

そしてジャクセアを縦断した上で北端から再度出発し、最後に《火山島カラスス》の西へ進み《イスルガルフ公爵領サツマ》現実の鹿児島県西部、薩摩国の入り口である《フォウンズポート》現実の鹿児島港北埠頭旅客ターミナルへと入る流れとなっている。

「航路の説明は以上だ。ここまでで何か質問あるか？」

一度線を引き終えて振り返り、一同に声をかける。

「最短中継点地点になるイヤクをわざわざ迂回する理由を教えてください」

すかさず一人目が問いかけて来たのを確かめると、Such☆はまず筆を納めた上で地図上のイヤクを指差し、次いでその指先をカラ

ススへとずらして説明を続けた。

「本当ならイヤクの前に《瘴気島シアーフィ》現実の鹿児島県硫黄島で休憩を挟んで九日と半日程度で《カラスス》に向かう予定だったんだが、生憎凶方位と凶座標が重なっててな」

Sutch☆が言葉を切ると、今度はか・みが北北東と北を示す赤い線を引き、そして《シアーフィ》、《イヤク》、《カラスス》を赤い円で囲みさらに説明を続ける。

「所要期間十二日の長旅になるけど、不要な戦闘を最低限に抑えて《ナインテイル自治領》に上陸するにはこの航路しかなかったからね」

二人は一度部屋の方へと視線を戻し、全員が話を聞いていることを確認するともう一度地図に視線を移す。この時航路を示す線の両端、つまり《ナゼの港》と《フォウンスポート》の部分に大きく点を記して強調する。

「もちろん吉方位が安全とは言わない。特にこの辺りはな」

筆を持ち変えて《ジャクセア》の中央部分にバツ印を書き込み、「要注意地帯」と書き加える。

「拡張パック導入前に告知されてた新しいレイドモンスターの出現ゾーンに選ばれてるから、運が悪ければそいつに襲われる可能性がある」

と、締めた。ノウアスフィアの開墾の施行開始と同時に始まった大災害、そして大災害の二次、三次災害の被害者は計り知れない。どこに居ようと関係なく、理由が何であろうと関係ない。

「何度も言うけど、装備とアイテムはしっかり用意しておくように。他に質問は？」

か・みが再び問い質す。本土を目指す船の出港準備が整えられつつある中、あんまろんは真剣な眼差しで一冊のメモ帳を見つめていた。

提供

『もしもし?……あんまろんちゃん?』

マリエールに念話を繋いだのは、風に押され波に揺られながら海路うみじを行く船に乗るあんまろんだった。驚きおどろと不安の混じった声色こわいろで応答するマリエールの様子に、あんまろんは思い詰めた気持ちを放り投げようように息を吐く。

「よかった……ちゃんと繋がって」

無論念話相手には見えていないが、自分自身の表情は安堵に満ちた笑顔。先日連絡を取った際は、数分にもならない短い時間しか会話ができず、そしてそのまま一昼夜という短いようで長い時間言葉を交わしていない。

人間とは実に不思議なものだと、つくづく思い知らされる。マリエールとはここ二ヶ月の間、一度たりとも連絡を取り合わなかったにも関わらず、今回の大災害という災難に遭って最初に、しかも迷うことなく念話を繋いだ。

(……ある意味、運命かも)

相手が念話に応じたことで安心しふっと笑うあんまろんと、彼女から返答があったことに驚き固まってしまったマリエール。両者は沈黙してしまい、その後数分ばかり無言のまま呆然と立ち尽くす。

「マリエール」

向かいに座るヘンリエッタが耐えかねたように、何かを話すよう促うながすのを見てはつとした。彼女の目を見てこくこくと頷うなずくと、少し呼吸を整えて言葉を切り出す。

「こっちの世界に来てからもう二日目やんな、元気しとる?」

問いかければ、あんまろんの返事はすぐに届いた。

『うん。早速だけど、少し報告したいことがあって……』

「ほんま!?!」

ゆつくりと椅子から立ち上がり、船内の休憩室から廊下へと移動しながら語る。一方、マリエールは思わず身を乗り出す姿勢になった。知らせたいことがあると言うのは、一体全体何事なのか。

向かいに座る人物が突然大きく体を動かしたことで、ヘンリエツタは驚いて少し体を震わせる。目を見開けばマリエールは「ごめんな」と耳に添えていない方の手を垂直に立て、言葉に出さずヘンリエツタに謝罪する。

『(びつくりした……) そうよ。聞いたら驚くと思うんだけど……』

動きも大きければ声も大きく、あんまろんも耳元でその声を聞き驚いて転倒しそうになった。しかし壁際にあつた手すりを掴んだために大事には至らなかつたため、感想も小声で囁くに止めて改めて報告を続ける。

「どーゆうこと?」

マリエールは緊張しているのを隠すように一度部屋を出る。あんまろんも階段を上がり、日の光に照らされて光沢を放つ甲板へと身を移す。

そして手すりに手をかけると、マリエールら現在のアキバの冒険者たちにとっては寝耳に水である事実を口にする。

『今、か・みと一緒に《ナカス》へ向かつてるの』

「……………」

あんまろんが放った言葉で、思わず目が点になり再び固まってしまふ。今彼女は何と言ったのかという疑問が、整理が追いつかない脳裏を過つてさらに混乱する。

『ええと……か・みが私と私のギルドメンバーの用心棒をしてくれるの。わかる?』

か・みという名が再び聞こえた時、マリエールは人生で最も大きな声で叫んだ。

応答

「いつ、い、い、今か・みと一緒にいる言うた!?そがいなことあるん!」
現状マリエールがこの生涯で経験した最大の驚愕は、あんまろんの口からか・みの名を聞いたこと。エルダー・テイルのプレイヤーであればその名を知らない者など一人としておらず、彼の名を知らなければ長年このゲームを愛好しているベテランであつても俄にわかプレイヤーの烙印を押される程の伝説的人物。

か・みが打ち立てた功績は数知れず、世界広しと言えど単独でレギオンレイド級のボスモンスターを相手取るプレイヤーは彼一人ぐらいのものとさえ言われているのだ。

そのような実力者が知人の中堅プレイヤーと行動を共にしているという事実は、同じく伝説的プレイヤー集団のメンバーと知り合う程に人脈の広いベテランと言えどとても信じ難いことである。

もちろんあんまろんも自分が話していることは誰からも疑われる内容であると理解しているため、マリエールのオーバリアクションに若干ながら同情している。

『そうよ。《アマミ》の《ナゼ》で知り合つて、成り行きでモンスターとの戦闘指南まで……』

その後はか・みと出会つた経緯、そして彼から受けた指導などを事細やかに説明して時間潰しをしていた。またうる覚えながら大地人の口から耳にしたこの世界に関わる情報や、戦闘経験から得た知識などもマリエールに伝え、情報共有はかを図ることも忘れぬ。

こうして念話を始めてから20分程が過ぎた頃。

「ところで、まだ《アマミ》におるんやろ?」

話題もちょうど尽きてきた頃合いを見計らい、マリエールの側から本題を切り出した。長話ながばなしに現うつを抜かして忘れていたあんまろんも、否定してから問いに答える。

『もう出港してるわ。これから《ナカス》に戻つて、トランスポートゲートでアキバに向かう予定なんだけど……』

この時彼女が発したトランスポートゲートという語に、マリエール

は少し悩むような表情をする。そして、思い出したかのようにギルド会館の廊下を歩きだし、少し間を置いて答えを返す。

「実はな、そのトランスポートゲートのことなんやけど……」

彼女自身は意識していなくとも、発せられたその声には躊躇いと憂いが見え隠れしているのが分かる。途中で言葉を切ったことから、真実を伝えるべきか否かという迷いがあるのが見てとれる。

『マリエールちゃん?』

つい先程まで途切れることなく会話を交わしていたと言うのに、話題を変えた途端突然黙りこくる念話相手に動揺を隠せず、改めて呼び掛けるが呼び掛けられた本人はなかなか答えてくれない。

『マリエールちゃん、どうしたのよ』

再度声をかけられ、やつと意を決した。静かに、そして長く息を吐き、心を落ち着けて問いかけに返答する。

「ええか? 落ち着いてよく聞いてや」

その一言で、両者の間に流れる雰囲気agaraりと変わった。心なしか空気に湿り気が生じたように、だんだんと呼吸が重くなる錯覚がある。んまろんを襲う。

対するマリエールも、体が重くなる感覚に身を委ねながら、その一言を紡ぐ。

「今な……………」

トランスポートゲートは、動いてへんねん――

「へ?」

刹那の沈黙の後、口から漏れたのは呆けたような声。衝撃としか表現できない事実、完全に放心してしまう。

「どう(どう)なん?」

数瞬程度放心していたあんまろんはマリエールから伝えられた言

葉を反芻^{はんすう}し、何とか心を落ち着けて彼女に問うた。

一方のマリエールは既にギルド会館の一階にまで降りており、人の疎^{まば}らなエントランスホールのソファに座り込み、一息吐いてから改めて答える。

『今朝合流した子から聞いたんやけど、昨日からうんともすんとも言わんのやて』

その表情は哀愁に満ちていた。

扉一枚

あんまろんとマリエールが念話を通じて情報交換をしている最中、オールトはそわそわと部屋の中を歩き回っていた。思い出すのは先日夕方、か・みの指導及び監督のもと執り行われたモンスターとの戦闘訓練での出来事である。

（ああ……ヤバい……一日経てば大丈夫かなとか思ってたけどやっぱり……）

遊撃手^{レンジャー}としては縦横無尽に動き回る柔軟な対応能力を、そして前衛攻撃手^{フロントアタッカー}として高度な牽制技術を求められるメイン職^{スワッシュユバツクラ}盗剣士^ス。この職業にあって更に難易度の高いビルドとして知られる投擲武器職^{ジャグラー}人である彼の相方^{ペア}となつたのは、あろうことか妖術師^{ソーサラー}であるアルタナであつた。

しかもビルドは壁役^{タンク}の護衛を付けることが前提となることが多い魔導砲台^{スーカ}、ヘイトコントロールと攻撃のため、戦場を常に移動し続けなければならぬ遊撃手と二人だけで戦うには余りにも不利で、まさに相性最悪と言わざるを得ない。

（……………こういうの、ホントどう表現したらいいんだろ）

だが実際にペアを組んで戦闘をこなした今となつては、遊撃手と遠隔攻撃手の組み合わせに対する印象も大きく変容している。もちろん一度目はとにかく敵に攻撃の隙を与えまいとアルタナの傍から離れず、ひたすら投げナイフを投げ続けることでモンスターを倒した。

だがこの行動は誰の目から見てもアルタナの攻撃行動を妨^{さまた}げているようにしか見えぬ、オールト自身も戦闘中は頭に血が登っていただけに、終わってからか・みに咎められて初めて気付く有り様。

結局休憩を挟みつつ五度に渡ってモンスターと戦う嵌めになつたが、この経験で得たことは決して少なくない。

（パーティ指揮はできない人だけど、ちゃんと人のことは見てるんだな……）

まず「敵に付かず、かつ離れず」を基本とする武器攻撃職の戦法を一から学び直したことで、味方から距離を置かないことによる最大の

弊害であるフレンドリーファイアのリスクが劇的に下がったこと。これは大きな成長と言えるだろう。

一度目の戦闘の際は上述した通り、アルタナを敵の攻撃から守ることに拘り過ぎてアルタナの行動を制限してしまい、結果戦闘自体を滞らせていた。しかしこれも二度目、三度目と繰り返すうちに洗練されて行き、五度目の戦闘を迎えた時には大災害前の水準にまで上達していった。

「今なら同格の相手とも互角に戦えそうだ！」

オールトは確かな自信を胸にガッツポーズを決め、腹の底から張り切った声をあげる。心なしか笑顔は明るく、目も爛々と光を帯びており、部屋に響く声からもいかに上機嫌なのが分かる。

「ようしー早速甲板を借りてアルタナさんと……」

気分の高揚を一切隠すことなく力を込めて踏み出し、そして自室の扉へと手を伸ばして廊下に出ようとノブをひねった。しかし廊下と部屋を隔てるその扉を引いた瞬間、「きやあつ！」という悲鳴とともに人影が自分に向かって倒れ込んで来る。

「うわー！」

オールトは倒れて来た人影に押し倒されてしりもちをつき、人影は彼に覆い被さるように転倒する。

「いった……大丈夫ですか!？」

この時頭を床に打ち付けたのか、後頭部に走る鈍い痛みで顔を歪めて起き上がる。だが文句を言いたい気持ちを抑え、自分に引つ張られて転んだ人物への心配も忘れない。

「いいえだいじよ……」

声をかけた人物が答えながら顔をあげると、ちょうど同じ目線で見つめ合う体勢となった。そして、互いの顔を見合わせて思わず硬直する。

「あ」

「……あつ……」

アルタナは、オールトと顔を見合わせ彼の膝の上に座ったまましばらく動けなかった。

U n r o m a n c e

「ふう……長話してもうた……」

あんまろんと一通りの話を終え、別れの挨拶とともに念話を切る。大災害から日が明けて間もないことを加味しても、10時も過ぎた頃だというのにギルド会館への人の出入りは相変わらず疎^{まば}らなまま。

一度^{まぶた}瞼を閉じて視界を遮^{さげ}り、再び開いて瞳を周囲に向けても、自分が視界に収めている景色に変化が現れる事などない。マリエールは失望に近い念を込めてため息を吐き、ソファの背もたれに背を預けて天井を見上げた。

（ウチら今後どうしよか……）

心の中で小さくぼやきながら目の前に浮かぶフレンドリストの中央で白く光る「あんまろん」の文字を見やれば、名前欄の下に小さく書かれた《Love On the Marine》の文字も自然に視界に入る。もう一度彼女と念話を繋いで雑談でもしようかと、震える手指でフレンドリストに触れようとするが、思い出したように顔を横に振り、その手を降ろしてステータス画面を閉じる。

（思えばウチら、あんまちゃんとは比べたら随分遠くに来てもうたな……）

目を閉じて思い出すのは、幼少期の出来事。もともとあんまろんと^{ひろおちひろ}と広尾千比呂、マリエールこと^{さかもとまりえ}坂本鞠絵、そしてヘンリエッタこと^{うめこ}梅子の三人は幼馴染みであり、近所では仲良し三人組として名の通った筋金入りの親友同士。どんな遊びをするにも必ず三人一緒であっただけでなく、外遊びを何よりも好んだお転婆者でもあったことは今でも昨日のことのように覚えている。

（こんなこともあったっけなあ……）

三人で駆けつこをしている時に梅子が転び、膝に擦り傷ができたのを^{ちひろ}千比呂と二人だけで応急処置をしたこと。家族連れで田舎に旅行した際、自分はずぶ濡れになりながら鮎取りをするのを眺めていた^{ちひろ}千比呂と^{うめこ}梅子と喧嘩になったこと。^{ちひろ}千比呂が作った花の冠のお返しに、^{うめこ}梅子と二人で押し花の葉を贈ったことなどなど。

たった二、三年の間だけの関係だったが、いずれも親友たちと過ごした幼い日の大切な思い出である。しかし、鮮明に記憶していた出来事は全てが喜ばしいことばかりではない。

(……ほんとに大丈夫やるか……)

千比呂の母が死去して父子家庭となり、彼女の父親は千比呂が高校に入学した頃に持病の心疾患が悪化したことで帰らぬ人となったと聞いている。世話好きで面倒見が良く、ただでさえ病弱だと言うのに、家族旅行には必ず坂本家と梅子の家族も巻き込んで連れて行ってくれた。

曰く「愛娘と仲良くしてくれるお礼」として旅行に同行することを許しているとのことだったが、今ではお礼というよりも贖罪としてわがままに応えていた。という印象が強いのは否めない。

「はあ……」

問題の母親は国会議員だった。しかも某政党の党員であった事から、周囲の大人と夫からは余り良い印象を持たれておらず、ことある毎に両親が陰口を叩いていたことも覚えている。

そして小学校入学前に、その事件は起こった。彼女が所属する政党が主催するエチオピアへの視察講演に、あるうことかまだ幼い千比呂を同行させると言い出したのだ。当然ながら千比呂の父は反対し、自身も梅子も引き離されては敵わないと引き留めようとした。

だが全ては無駄に終わり、母はエチオピアで暴徒に襲われて死亡。千比呂も暴行を受け、帰国した時には人が変わったように無口になり、他人と関わることを避けるようになった。事件の後すぐに引越し、小学校も転校してしまい、長らく連絡が取れなくなっていた。

「ごめんな……」

彼女らが千比呂と再会したのは、ちょうど受験生になった時期である。エルダー・テイルを始めて間もない頃に、ヘンリエッタと共にあるダンジョンに挑んだ際、偶然パーティーを組んだ人物の声が千比呂だと気づいた時は、それはとても嬉しかった。

その時は、千比呂も心動かされて泣いていた。ボイスチャット用のスピーカーとインカムを通して思い出話を語り、最近の話題を語り、

夜が更けるまで談笑していた。

「会いたいよ……」

そして、翌日に備える別れ際に彼女が語った、「あんまるん」というアバターネームの由来の話が、強く印象に残っている。

(あのな……ほんまは言うたらあかんねんけど、なんでそがいなけつたいな名前なん?)

躊躇ためらい気味に問いかけて、返ってきたその答えは。

(Unromance。〃ロマンなんて求めない〃って意味で決めたの)

あまりにも、哀かなしげな色を含んだ声だった。

鍛錬・上

マリエールが思い出に耽っている頃の船の行方に視点を移すと、穏やかな海を渡る船の甲板では、オールトIIアーザンとアルタナの二人が、あんまろんとSutch☆の監督のもと模擬戦を行っている。

……のだが、その様子は模擬戦と呼ぶには派手な動きが少なく、誰の目から見ても普通の稽古にしか見えないほどに地味な内容である。

「脇は閉める！ 足は常に広げて！」

振り返り様に足がもつれて転びそうになった瞬間を見計らい、力強く甲板を蹴って接近してくるあんまろん。槍を持つ手を離し、慣性を利用した勢いと重みのある刺突が、頬にかするすれすれの部分で止まる。

「ほらーちゃんと避けなさい！」

一度引かれたかと思えば、その槍は持ち換える動作で縦に回転し、柄頭が脳天に向けて振り下ろされる。オールトは罅迫り合いに追い込まれながらも何とか攻撃を防ぎ、あんまろんから距離を取って改めて声かけに答える。

「聞かしてやるぜ！」

「はいー！」

オールトは柔軟・迅速・軽快の三拍子を求められる武器攻撃職であり、そして遠距離からの攻撃を前提とする支援攻撃ビルド。足元がもたつけば動きは鈍り、先ほどのように隙ができ、格好の的になる。

「どんどん行くわよ！ 気を張って！」

中距離での戦闘に特化した性能を持つ武器攻撃系職業にあって、攻撃力の低さが難点だがその代わりに支援系のスキルを多く修得する吟遊詩人。

しかし現在相対するあんまろんは吟遊詩人に二つ用意されているビルドのうち、非常に高い集中力が必要とされるコンサートマスターでありながら前線に立って戦う戦闘スタイルを好んでいる。

（もともと、積極的な人だけどっ……昨日一日で変わり過ぎでしょー！）

防戦一方のオールトが驚嘆した通り、あんまろんは先日の戦闘指南

でがむしやらに武器を振り回していたのを矯正されたことでムラがなくなり、攻撃のキレが増して一撃あたりの威力が跳ね上がっている。

さらに才能があったのかたった三回の実戦で太刀筋も洗練されており、現在「ノイジービースト」によつて振り回されている槍の先端も寸分狂わずオールトの心臓を狙っている。

これを回避するのは一筋縄ではいかない。

「もっと早く避けて！かすったら即死だと思いなさい！」

「はっ、はい！」

時が経つに連れて密度が高くなる攻撃と、攻撃に併せるように過激になつていくあんまろんの激励。

人間は短い間にここまで変わるものなのかと、オールトは内心で驚愕していた。

鍛錬・下

オールトがあんまりんを相手取って戦闘訓練に励む一方、アルタナもまた Sutch☆と向かい合って同じく戦闘訓練に精を出している。もちろん鍛錬の内容はオールトが受けているものとは大きく異なり大分落ち着いたものであるが、これは森呪使いという職業が直接的な戦闘に不向きなことも影響しているため、本人の戦闘スタイルも相まってほぼ必然と言えるだろう。

「そうだ。ゆっくりでいい」

指示されるままに杖を構え、ぎこちなくゆっくりと円を描くように歩き、そして船体の外に向けて狙いを定める。杖の先端に光が集まる演出が収まると同時に、船から30mほど離れた海の上に風が渦巻き始め、3秒後にはより大きな風の球体へと変貌する。

「今だー解放ー」

Sutch☆が合図すると同時に虚空目掛け、攻撃魔法「タイフーンスクリュウ」を放つと、水面を穿つように細長い竜巻が発生した。アルタナが受けているのは、敵の攻撃を避けて移動しつつ攻撃魔法を的確に放つために必要な、集中力と同時作業の効率を高めるための訓練。

もとより魔導砲台というビルドを組む妖術師の多くは、広範囲にわたる大規模な魔法攻撃を得意とするがゆえに集中力は必須である。そのため常に戦場を動き回る移動砲台を目指すともなれば、すべからず極めて高い集中力を求められる。

「15……14……13……」

「リキャストタイムは声に出さなくていいぞ」

この難易度の高い訓練を可能とするためには、MP消費が少なく、キャストタイム・リキャストタイムがともに短く、かつ効果が分かりやすく現れる魔法を使う必要があった。

そしてこの条件を満たす魔法はとても少なく、それこそ数える程度しか存在しない。そのため単体攻撃魔法でありながら距離を指定でき、一時的ながら地形を変化させる効果を持ち、さらに消費MP量と

リキヤストタイムが短いという好条件を持つ「タイフーンスクリュー」はまさにうってつけと言うわけだ。

「32m……上々だな。次は半分くらい近づけてみよう」

半分、つまり今度は16m程度の距離で「タイフーンスクリュー」を発生させると言うこと。二人は一度船のまで移動し、もう一度訓練に取りかかる。甲板の方からはあんまろんとオールの掛け声と、剣と槍がぶつかり合う音が聞こえている。

「それじゃ、四回目だ」

アルタナはSutch☆の指示に従い、「タイフーンスクリュー」を発動する。手に持つ杖の先端に光が集まり、MPの消費が始まる。

「左へ行くぞ。少し急げ」

早足で船体の左舷に移動しつつ、視線は海面に狙いを定めるように動かさない。まっすぐに海を見つめ、合図を待つ。

「次は右」

左に向かつて歩いていたので方向転換し、今度は右へと移動する。そしてそのまま右舷へと位置を変える頃には、再び渦巻く風の球体が海の上に浮かんでいる。

「解放！」

「はい！」

合図と同時に構えた杖をまっすぐ海に向け、「タイフーンスクリュー」を放つ。竜巻の真下の海原には、先ほどと同じく渦巻き状の穴ができていた。

幕間 総統 (Mi) 閣下 (Lord)

「Sutch☆から連絡が？」

ここは《アキバ》最大規模の戦闘系ギルド《D・D・D》が根城とする《アキバギルド会館》のギルドホーム。その中央に設えられた会議室の奥にある、上座の席に一人の男が座っていた。

男の名は「クラスティ」。戦闘スタイルの脳筋ぶりから本人のサブ職業に合わせて「狂戦士」と渾名される生粋の専制攻撃主義者である。

「はい。《蛇神島》で「か・み」と名乗るプレイヤーと合流し、現在《ナカス》へ向かっているとのことですよ」

クラスティの座る椅子の隣に立ちつつ報告するのは、彼とほぼ変わらない身長を持つ知的な印象の女性、「高山三佐」。クラスティの腹心にして懐刀、すなわち補佐役としてギルド《D・D・D》を牽引するベテランだ。

冷静沈着という言葉がよく似合う彼女の態度は、その表情の変化の乏しさから戦闘時には半ば冷酷にさえ見える。

「か・み……そうか……そうだったな……今思い出したよ」

三佐の口から飛び出した名前に対する答えからして、エルダー・ティルのプレイヤーである以上当然とすべきか、はたまた例外なくとすべきか、クラスティもまたか・みの名を認知しているようであった。

神出鬼没であるとは良く聞く話だが、そもそも名前だけが有名で、アバターもリアル姿も分からないプレイヤーなどいるのだろうかかと、エルダー・ティルを始めた頃から疑っていた。

だがSutch☆ほどの実力者が「本人と直接言葉を交わした」と大はしやぎしながら連絡を入れて来るのは、それこそ確かな実力と実績を持つ有名人たちと関わった時くらいである。

「正直に言っただけ、Sutch☆の口からあの有名人の名前を聞くなんて、先ほどまで微塵も考えていませんでしたので」

三佐本人は至って真面目な表情、平静な態度を保っているつもりな

のだが、クラスティは彼女の手元や指先の動き始めから興奮と高揚、そして期待感をにじみ出している事をあつさり看破してしまっていた。

「この際、か・みほどのプレイヤーとパイプができたのは大きな縁だ。せつかくだから、ログインメンバー全員分のサイン色紙を頼んでおこうか」

と三佐みさに向けて自身も半分冗談で半分本気、しかし全く興奮を隠さない声色こわいろでほつりと呟くと、

「再度Sutch☆に連絡致しますので少々お待ち下さい」

三佐みさは即答した。

釣り落としした魚は大きい

《ナゼ》から出港し《ナカス》を目指す航海が始まって早くも3日が経過したが、今日到着予定の目的地である《雨林島ウーベルフェルゼン》は未だに島の影だけが遠くにぼつりと見えるだけ。

順風満帆とは言い難い^{がた}が予定に狂いはなく、特に大きな変化も見られない現状に早くも暇を持て余しはじめた面々は、訓練を一時中断して甲板に集まり、魚釣り大会を催^{もよ}していた。

……………のだが、

「……………つまんね」

画一的なゲームシステムの弊害は、なんとこのような単純な娯楽にまで及んでいることを思い知るはめになったのである。如何にも不良然とした態度のドワーフの少年、【空鐘^{カラベル}】が釣竿を置いてぼやくほど、とにかく獲物が釣竿にかからない。

甲板に置かれたいくつかの魚籠^{びく}には、既に魚型モンスターが二十匹以上入っているが、《釣り》スキルのレベルが低い他の乗船者たちの魚籠^{びく}は中型のものが数匹程度、あるいは雑魚一匹すらもない空のものまである始末。

《漁師》のサブ職業を持つ空鐘^{カラベル}がいてこうなのだから、これこそ運が悪いか言えない。

「つまんねっつーか正直、ゲームシステムの強制力舐めてたわ」

空鐘^{カラベル}がまた大物を釣り上げるのを退屈そうに眺めつつ、相棒のエルフの守護戦士^{ガーディアン}【閻鈴^{クラベル}】が生け簀^{びく}に魚籠^{びく}の中の魚を放り込んでいく。

事の発端はあんまりだが、「メニューを通じたコマンド操作なしで技を使えるのなら、必要なスキルさえ習得していれば現実世界で日常的にしている事の大部分が普通にできるはず」という持論を展開し、実際に自身のサブ職業である料理人(の上位職種、料理師Lv. 87)のスキルと今は亡き父直伝の調理技術を駆使した和食膳を作った見せた事にある。

この場にいるプレイヤーたちは大災害直後、木亭宿の食堂や屋台で食事を摂ったのだが、この時に食べた料理がことごとく微妙で、とて

も美味しいとは言えない味だったために、フレーバーテキストの内容は決して嘘ではないと思いき知らされたのだ。

このような一件もあり、「人間が自分の手で作る事」の重要性に早く気付く事が出来、心の「この事実は早めに広めるべき」という意見に従い、各々フレンドたちに連絡を入れるに至った。

ここまででは良かったのだが……

「なんか……バカにされてる気がする……」

心は小魚しかかからない自分の釣竿と、小魚しかいない自分の魚籠びくを交互に見返しながらまたぼやいた。

大災害から十日足らずで新事実に到達できたのは喜ばしいが、帰還のために必要な情報とは到底関係あるようには思えず、やっとな掴んだヒントは儂くもゲームシステムによって阻まれるという不幸。

こうして退屈に流されている間にも、船は《ウーベルフェルセン》へと近づいていた。